
見習い勇者セカンドストーリー

零塔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見習い勇者セカンドストーリー

【Nコード】

N3951S

【作者名】

零堵

【あらすじ】

魔王が再び復活して、それを倒すために無理矢理旅をする事になった。リユート。幼馴染のマゼンタも勝手にリユートの旅について行く事になり、新しい勇者の冒険譚が始まったのでした。ちなみに語り部が勇者の味方ではありません。

〈第一話〉リユート旅立つの巻

昔、三人の若者が、魔王と呼ばれる天敵を倒しました
それから数十年後、新たな物語の始まりです

「ふ・・・我！復活wむ・・・時間が随分と経過しているようだな？」

ここは、何処かの村の小屋の中
ここに、誰かいました

その者は、魔王と言って、変人でしたw

「こら！誰が変人だ！我は魔王、強いのだ！」

じゃあ何で封印されてたんでしょうね？

「む・・・それは油断しただけだまだ、我の力が存分に回復するには結構時間がかかるな？うむ・・・」

そう言って、魔王は姿を消したのでした
飾ってあった、一本の剣を残して・・・

村

ここに一人の少年の悲鳴が聞こえてきました

「うわああ！マゼンタ！やめろ～～～！」

彼の名は、リユート

金髪の少年で、青い瞳をしていました

「何言ってるのよ？リユート、私の魔法の成果を試そうとしてるんだから、協力しなさいよ！」

そう叫んでいるのは、リユートの幼馴染であるマゼンタでした、マゼンタは赤い長髪をツインテールに結んで胸に緑のブローチ、手には古そうな杖を持っていました

「だから、何の呪文なんだよ！」

「それは、火の呪文よ！さあ、喰らいなさいよ！我、火の精に集まらん、エレメンタルファイヤー！」

マゼンタがそう言うと、杖からでっかい火の玉が出てきました

あの〜？それってかなりやばそうなんですけど、リユートは大丈夫でしょうかね〜？

「うわあああ！」

あ、直撃しちゃったみたいですね？リユートは、真っ黒になって動かなくなりました

これからどうするのでしょうか〜？

「よし、成功wあとは回復の呪文ね？癒しの力よ、我の力によって叶えたまえ！ヒード！」

マゼンタが回復の呪文らしき物を言いました、しかし・・・数十分経っても、何も起こりませんでした

「・・・何で火の呪文は出来て、回復の呪文は出来ないんだよ！」

「あれえ〜？おかしいな？ちゃんと勉強したのに？何かが根本的に間違ってるのかな？」

「人の話聞けよ・・・」

リユートは、黒こげになりながらそう言っています
災難ですねw

「うるさあい！」

「あ、もうこんな時間だ？じゃあ帰るね・・・ってあれ・・・」

マゼンタは、何かを見つけました、それは、物凄いスピードでこちらにやって来ました

「子供か・・・」

その者はそう言いました

リユートとマゼンタは、こう言いました

「子供で悪かったわね！」

「あの・・・それ何かの曲芸師ですか？獣見たいな格好で劇の宣伝に来たんですか？」

「は？」

その者は驚きました、まあ当然ですよ〜

その者の格好は、上半身は狼みたいな格好で、下半身は人間ですからそう思われるのでしょうかw

「私は魔王の部下のレーターだ！この村を滅ぼしにやってきたのだ！」

「ま・・・おう？」

「何それ？」

「し、知らんのか？」

「うん」

「知らない」

「いいか？魔王と言うのは・・・」

レーターは、学校の先生みたいに魔王とは何か？を話すのでした。はつきり言って馬鹿っぽいですね

「と言うわけだ！」

「ふーん、じゃあ貴方は敵なんですね？」

「む・・・結果的にはそうなるな？」

「なら決まりね！」

「は？何がだ？」

「貴方を倒すに決まってるでしょ！」

「そうくるか・・・なら！相手してやる！」

レーターは、そう言って襲い掛かってきました

マゼンタは、それを見ると杖を構えてこう言いました

「喰らいなさい！私の魔法！我、火の精に集まらん！エレメンタルファイヤー！」

「な！何だと！ぐはああああ！」

レーターは、マゼンタの魔法を喰らって一撃で倒されました、はつきり言って秒殺です

情けないですね

「やったわ！この魔法、使えるわね？」

「そう思うんなら、俺を実験に使うな・・・」

リユートは、そう呟いているのでした。

家に戻ってこの出来事を親に話すと、何故かリユートの父親が

「そうか・・・この時が来たか・・・」と言いました

「は？何それ？」

そして、父親に案内されて、一つの小屋の中に行きました。小屋の中には、一本の剣がありました。

「あの・・・この剣は？」

そうリュートが言うと、父親は「魔王退治に使う剣だ！さあ旅に出ろ！」

と言って、無理矢理装備させるのでした

「いきなり！？ちょ・・・俺に拒否権は無いのかよ！」

そう言うと、「当たり前だ」と一言だけしか返ってこなかったのです

本当に災難ですね

「・・・解ったよ・・・やればいいんだろ・・・」

リュートは、どうやら諦めたみたいです？そう言って、外に出るとマゼンタがいました

「あれ？リュート？どっか行くの？」

「親父に無理矢理、「魔王退治に行け」と言われてな・・・行く羽目になった」

「ふうん・・・じゃあ私も一緒に行くね？」

「は？何で？」

「だって、戦うんだったら戦力は一人でも多かった方がいいでしょう？それに別の町とかに行って、新しい魔法とか習いたいしね？はい、これ決定」

「まあ別にいいけど・・・」

こうして、リュートとマゼンタの魔王退治の旅が始まったのでした・・・

く第二話くリユート旅立つの巻く（後書き）

はい、見習い勇者の続編です。

前作と違い、キャラに名前がつけました。

ちなみにイラストもあるので、出来たら載せようと思います。

第二話　魔術師との遭遇の巻

さてさて、前回、リユートとマゼンタは魔王退治の旅に出発する事になったのでした
でも、何か気がつく事はないですか？

「あ！」

「どうしたの？リユート」

「なあマゼンタ？魔王の居場所って解るか？」

「うんうん？ぜんぜん解らないよ？」

そうなのでした、リユートとマゼンタは魔王が何処にいるかも解らないで、旅をしているのでした
はつきり言って、馬鹿ですね

「五月蠅い！どうする？マゼンタ？」

「そうね・・・とりあえず近くの町にでも行ってみる？何か情報を集める事が出来そうだしね？」

「じゃあ、近くの町に行くか」

リユート達は、町を探す事にしたのでした
数十分後、小さな町を見つけたのでした
その町の名前は、アルベールと書かれてありました

「人々の憩いの町、アルベールかあ」

「何か情報が集められそうね？入ってみましようよ？」

「そうだな」

リユート達は、町の中に入る事にしました
町の中は、中央に噴水があり、まわりにベンチが置いてあり
鳥がいっぱいいて、確かに平和々と思わせる雰囲気を漂わせていま
した

「さて、どうしようか？」

「そうね・・・あ、あそこでなんかやってるみたいよ？リユート？」

マゼンタは、何かを見つけたようでした

リユートは、その場所を見ると、魔術の実験と書かれたショー見た
いな事をやっているのですでした

「で？マゼンタは見たいわけ？」

「当たり前よ、新しい魔術の開発の研究にもなるしね？リユートも
見てみようよ？」

「そうだな・・・まあやる事ないし、見てみるか」

リユート達は、魔術の実験を見る事にしたのでした

魔術師の館

やっていたのは、紫マントに紫帽子を被った男が、杖を持っています
はつきり言って、魔術師スタイル？と呼ばれている服装でした

「いゝひっひっひ！さあ我が魔術の実験によろこそ！いゝっひっひ
っひ！」

いきなり変な笑い方でリユート達を出迎えました
はつきり言って、怖いです、はい

「なあ・・・なんか怪しくないか？このおっさん」

「魔術師というのはそういうものなのよ？」

いや、マゼンタさん・・・その知識は間違っていると思いますけど？

「さあ、今回の実験は、火を水に変える呪文だゝいゝっひっひっひ
っひ！」

怪しい笑いをしながら、ニコニコ顔で言っています
普通の人なら絶対にひくと思いますねゝ

「これでどうだ！ 我の命により、変換せよ！」

魔術師は、見事に火を水に変えたのでした
それを見たリュートは、マジで驚きました

「おお！ すごい」

「さすが魔術の力ね！ 私も見習わなくっちゃ」

「いゝっひっひっひ！ お客さん？ 魔術に興味がおありかな？」

「はい、出来ればその魔法、教えてほしいんですけど？」

「いゝっひっひっひ！ なら教えてやろう！ 変換呪文イツチェンジを！」

そう言って、魔導師はマゼンタを手招きして、奥の部屋に連れて行ったのであった

そして、数十分後、ニコニコ顔でマゼンタが戻ってきました

「リュートW覚えたわ！ 早速使ってみるわね？ 我の命により、発動せよ！ エレメンタルファイヤー！」

マゼンタは、いきなりリユートに向かって魔法ぶっぱなしました
ひどいですね〜

「うわ！何するんだ！マゼンタ！」

「大丈夫大丈夫！、変換魔法！イッツチェンジ！」

マゼンタの魔法の炎は、一瞬で水に変わりました

「やった、成功」

「何が成功だ〜！ずぶ濡れじゃないか〜！」

そうなのでした、マゼンタの魔法の炎は水になったのでリユートに
大量の水がかかったのでした、災難ですね〜

「まあいいじゃん？成功したんだし、師匠ありがとうございました」

「うむ」

いつの間に師匠になったんですか？

マ「あ、そうだ師匠、魔王の居場所って知ってますか？」

「魔王？ そうだな・・・北の方角がモンスター大量発生と言う噂が流れているのだが、そっちじゃないか？ いっひっひっひっひっ！」

「北？ ありがとうございます師匠、リユート、北だって」

「北？ まあ他に行く所無いし、行ってみるか・・・その前に・・・」

「その前に？」

「マゼンタ！ 謝れよ！ 人をずぶ濡れにしといて！」

「あ、そうだったね？ ごめんごめん」

「マゼンタ・・・全然反省して無いだろ・・・」

「では、師匠、ありがとうございました」

「うむ、また気が向いたらいつでも来い、いっひっひっひっひっ！」

こうして、リユート達の行き先がとりあえず決まりました
北に何かあるのか？ それは、まだ解りませんでした・・・

く第二話く魔術師との遭遇の巻く（後書き）

リユート・・・災難ですねぇ
w

第三話　格蘭少女との遭遇の巻

さてさて、前回リユート達は、アルベールの魔術師から、北に何かある！と言われて、北に進む事にしました

「なあ・・・」

おや？リユートが、マゼンタに何か言っていますね？何を言ってるんでしょうね？

「何？リユート？」

「北に向かっているのは良しとする・・・でもな・・・この状況を何とかしろ～～～！！」

そうなのでした、リユート達は魔物に囲まれている状況にあるのでした

それは何故かですって？それはですね

北に向かって、旅をしていたらばったり会ってしまったからなんですよ？本当に災難ですね

「五月蠅い！と、とにかくこの状況を何とかしないと・・・マゼンタ、魔法でやっつけてくれないか？」

「別にいいけど？それじゃつままないでしょ？」

「つままないって・・・敵に囲まれてるのに、何がつままないだあ！」

「だ・か・ら？こういう時は、キャー助けてゝ誰かゝって叫べば、誰かしら助けてくれるって？」

「本当かよ・・・」

「私の言う事に間違いは無いわ？キャー助けてゝ」

マゼンタはそう言いました

それで誰かやって来たら、いいんですけど来る筈ありませんよねゝ？だって、敵に囲まれているのに助けに行って、やられたりでもしたら、いい笑い者になっちゃいますしね

「大丈夫ですか！？」

「え？」

いきなり声がしたので、驚きました
本当に誰か、やって来たみたいですね？

「ほら、私の言う事に間違いは無かったでしょ？」

「嘘だろ！？」

やって来たのは、緑の髪に紫の瞳をした少女でした

「私は、旅の拳闘士、ククル、魔物に囲まれている貴方達、助けてあげます！」

ククルは、そう言って、拳をかまえて魔物に向かって、突撃しました

「くらいなさい！裁きの鉄拳！バルバードアタック！」

ククルは、素早い動きで魔物の急所？の所を何発も打ち込んだのでした

はつきり言ってむごいです、はい

「あっはっは！私の勝ちね」

「何？この人・・・」

「さあ・・・でも何とか助かったわ」

「何が助かっただ？よくも俺の部下をやっつけてくれたな？」

「お、お前は！」

リユートと、マゼンタは見覚えのある者に出くわしました

「誰だっけ？」

「名前・・・ペーター？」

「誰が、ペーターだ！俺はレーターだ！」

そう、以前リユート達の前に現れた魔王の手下
レーターが、その場にいたのでした

「何でお前がいるんだ？確かマゼンタの魔法で完璧に灰になった筈

じゃ？」

「俺がそんな単純な魔法でやられると思ったか？あの後、急速に再生して元の姿に戻ったのだ」

「うわ、何コイツ、気色悪く」

うんうん、確かにそうですね
灰になって、元通りに直るなんて、はっきり言って
ゾンビですよ

「何とも言え！よくも俺の部下を倒してくれたな？この恨み、お返ししてやる！」

あのく？倒したのは、リユート達じゃなくて、ククル何ですけど？

「俺たち、何もやってないんだが？」

「そうよ、私達は倒してないわよ？」

「問答無用！成敗！」

「どうやら、やるしかないみたいだな・・・」

「また、灰にしてやるわ！かかって来なさい！」

「何か面白そうね？私も加勢するわよ？」

こうして、レーターとの戦いが、再び、始まろうとしているのでした・・・

〈第三話〉格闘少女との遭遇の巻〈（後書き）

はい、新キャラのククル登場です。まだまだ続きます〈

〈第四話〉敵との戦いの巻

さてさて前回、リユート達は、前に村に現れた敵
レーターと戦う事になったのでした、一体どっちが勝つか解りませ
んがまあ結果は見えてますね？

「やってやる、魔王様の為、邪魔者をやっつけてやる！」

レーターは、そう言いました、あのく？そんな事言って大丈夫です
か？

「私に勝てると思ってるの？一度やられたくせにね？」

マゼンタは、そう言っています

「こいつがどんだけ強いか興味があるわ、さあかかって来なさい！」

ククルは、構えてそう言っています

「俺・・・別に戦わなくてもよくないか？」

リユートはそう呟いてました、ここで何か気がつきませんか？
そう、結果的に三対一なんですよ？だからレーターは、かなり不利
ですね？

「問答無用！先手必勝！喰らえ！」

レーターは、そう言ってリユートに攻撃してきました

「ちょっとちょっと待て！俺は一応無関係だあ！」

「聞く耳もたん！死ね！」

「リユート！」

「うわ！」

リユートは、レーターの攻撃をギリギリで避けました
けれど避けるのが限界見たいです、反撃したらいと思うんですけどね？

レ「避けても無駄だ、喰らえ必殺、餓狼激乱舞！」

「何だそりゃあ！」

リユートは、レーターの攻撃にびっくりしました、まあ当然ですよ
ねっ？だって
レーターったら無数のパンチをリユートに向かって繰り出してきま
したからですよ

「リユート！、怪我したら私が呪文で直してあげるから安心して？」

「安心できるか！マゼンタ、回復魔法失敗しただろっ！」

「大丈夫♪何とかなるって♪」

「ホントかっ？」

「拳なら、私も加勢するわ、やあ！」

ククルは、レーターに向かって殴りかかりました、レーターは、襲
いかかってくるククルに対し、防御で防ぎました

「甘いわ！覚悟！」

「うわあ！」

リユートは、やられると思いました、そして攻撃を喰らう瞬間
リユートの持っていた剣が光出し、レーターを吹っ飛ばしたのでした

「リユ、リユート？何なのよ一体！？」

リ「解らない、けど・・・頭の中に色々な知識が入ってくるんだ！
？」

「まさか・・・その剣は、過去に魔王退治に使われたという、勇者
の剣？」

「何？その”勇者の剣”って？」

「私が噂に聞いたんだけど、何でも魔王という馬鹿が世界を暗黒に
包み込もうとしたのを、三人の伝説の戦士達が魔王退治の時に使っ
た剣が何処かの村に封印されてあるって聞いたんだけど・・・」

「それって・・・」

「俺達の村の事だよなあ・・・って事は、これは本当に伝説の勇者
の剣なのか？」

「今・・・お前、魔王様の事を馬鹿と言ったろ？なあ！」

おや？どうやらククルの言った事に対して怒っているようです
確かに誰だって馬鹿と言われると、怒りたくなりますよね

「言ったわ？私って魔王っていう存在に対して、あまり信じて無いのけど・・・ここにその剣があると言う事は、魔王もいるって事よね？」

「当たり前だ！魔王様を侮辱した罪、制裁してやる！」

レーターは、本気で殴りかかってきました

ククルは、こう何かを思いついたらしくこう言いました

「勇者様！私は、この変態獣人に襲われてしまいます！
どうか助けて下さい！特に、その金髪の少年！」

「お、俺かよ！？」

「だって話によると、三人の伝説の戦士達の一人は、金髪の少年だ
って聞いているのよ、だからあなたでしょ？金髪だしね？」

「リユート、助けてあげなよ？魔王退治を目標に旅をしているんでしょ？」

「ああ・・・そうだな、しょーがないからやるか・・・拒否権無さそうだし・・・」

「当たり前よ、リユートは一応正義の者なんだから」

「しょーがないからやるだど？ふざけるな！」

レーターは、ククルに攻撃しようとしたが標的を変えて、リユートに攻撃してきました

「やるしかないのか・・・いくぞ！食らえ！親父直伝！十文字斬！」

リユートは、剣を持ち、レーターに向かって十字に切り裂きました

「ぐはあ！俺は、何度でも蘇るぞ！」

そう言って、消滅しました
でも・・・私はこう思います

何度でも、蘇ると言えば・・・ゾンビ？って思いますね？

「消えた・・・マジシャン？」

何を言ってるのでしょうか？

「勝ったわ、さすがリユート」

「いや、俺は何も・・・頭に浮かんできた武器の使い方とか、技を使っただけだよ」

「ありがとうございます、貴方・・・もしかして本当に勇者？」

「ああ・・・結果的にはそうなるかな？俺の祖父が伝説の勇者らしいし」

「そうよ？私達は、魔王退治の旅をしているの、まあ私は新しい魔法覚えたいから、ついていっているだけだけどね？」

「じゃあ・・・私も一緒に加勢するわ」

「え？」

「何でなの？」

「だって、戦うとしたら人数が多いほうがいいでしょ？それに・・・
貴方に興味があるしね？」

「マゼンタと、同じ事言っていないか・・・？」

「同じじゃないわよ？リユート、私は魔法覚えたいと言ったわよ？」

「とにかく、私も一緒に魔王と戦うわ、強さも知りたいし」

「ま、まあ・・・戦力が多い方が、戦いやすいかもな？」

「そうね？」

「これからよろしくね？リユートとマゼンタ」

こうして、流浪の拳闘士ククルが、リユート達のメンバーに加わったのでした

〜第四話〜敵との戦いの巻〜（後書き）

リユート達に新たなメンバーが加わったのでした。

〈第五話 闘技場の話の巻〉

リユート達が、レーターを倒していた頃、魔王はと言うと

「レーターが、やられたか・・・せっかく作ってやったのにやられるとは、情けない奴だ」

あゝ？何言ってるんですか？貴方何もしてないでしょ？何もしてないのにそんな事言われるとなんかむかつきます

「魔王様、今度は私に行かせて下さい、レーター見たいな獣人馬鹿よりは、役に立つと思います」

おいおい何気にこの人、酷いこと言ってるよ

「キルデットか、なら行ってくるのだ！頼んだぞ！」

魔王は、そう言いました

そして、キルデットがその場から消えると、魔王はこう言いました

「さて、はまっているシュミレーションでもクリアするか」

あゝ？部下に命令しといて、何自分は遊んでるんですか？Wまあ、魔王だからしゃーないか・・・

さて、リユート達はどうなったのかと言うと

「なあ、マゼンタ・・・」

「何よ？リユート」

「ここ・・・何所だ？」

「私が知る訳ないでしょ？ククルは知ってる？」

「一回も立ち寄った事が無いので、解らないですね」

リユート達は、大きな川の所にいました

近くには、一つの町があります、どうします？

「あの町で、魔王の情報でも調べるか？」

「そうだね？あそこでも魔術とか覚えられるかな？」

「よし、行くぞ！」

「おおー！」

リユート達は、町に行く事にしました
町に辿り着くと、いきなり番兵にボンジュールと言われました

「なあ・・・ボンジュールって何だ・・・」

「さあ？なんかの挨拶じゃないの？」

「私は知ってますよ？」「貴様らここに何用だ？言わなければ監獄にぶちこむぞ？って意味かと？」

多分、いや絶対違うと思いますけど？

「いや、それは無いだろ・・・だって・・・やって来た者にいきなりそんな事言われたら、誰だって入れないって」

「私が考えるには「ようこそこの町に、のんびりしていつてね」じゃない？」

「多分それだな、てか絶対そうだと思う」

「ええ？私、そうだと思ってたのに・・・」

ククルだけが納得していなかったのです、そして、リユート達は

町の中に入りました

町の中は、にぎわっていてとても平和そうでした

「なーんかここに来て何も情報が得られるとは思えないな」

「確かにね・・・だって、誰も魔術師の格好をした人がいないんだもん」

「そういう問題か？」

「リユートにマゼンタ、あそこでなんかやってるよ？」

ククルは、何かを見つけたらしく、リユート達に言うのでした

「ん？あれは・・・闘技場？」

「闘技場ってあれ？弱い者に魔物と戦わせて、観客が楽しむって奴？」

あのか？それは違うと・・・てかそれは虐めに近いのでは？

「ねえ？やって見ない？優勝したら商品が出るらしいし？丁度3人チームで登録中って書いてあるわよ？」

「どうする？マゼンタ？」

「そうね・・・やるわ」

「はや！何で！？」

「だって、私がどのくらい強くなったか知りたいし、それに魔王退治の旅だから、自分がどのくらい強いのか知りたいしね？リユートも参加Okでしょ？まさか断るつもり？」

「う・・・解ったよ、やればいいんだろ？やれば！」

「そうこなくっちゃ、じゃあ登録して来るわね？」

ククルはそう言うのと、登録しに行ったのでした、そして数分後、戻って来てこう言いました

「ねえ？リユートとマゼンタ？チーム名は何ですか？って聞かれたけど？どうする？」

「チーム名？そうね・・・マゼンタと愉快的仲間達ってどう？」

「おいおい・・・それじゃマゼンタが主役みたいな感じじゃないか・・・普通に考えろよ・・・もっとマシなのがいい」

「じゃあ・・・イニシャルから取って、RMKチームってどう？」

「それなんかカッコいいわね、それにしない？リユート」

「まあそれでいいんじゃない？俺は別に構わない」

「じゃあ、登録しに行くね」

そう行って、登録しに行きました

こうして、R M Kチームの戦いが始まるうとしていたのです・・・
一方その頃、キルデットはと言うと

「あれ・・・？ここ何所だ？」

キルデットは、道に迷っているのです

リユート達に本当に会えるのでしょうか？あははは

「くそ・・・馬鹿にするな！私は何としても魔王様にご期待に答えるよう努力するのだ！待っている！勇者の末裔よ！」

そう叫んでいました、誰も聞いてませんけどね？
一方魔王はと言うと

「ふ・・・楽勝だな？このシュミレーションは」

そう言って、ゲームに夢中？なのでありましたとき

く第五話く闘技場の話の巻く（後書き）

はい、まだまだ続きますく

〈第六話〉闘技場のバトルの巻

さてさて、前回、リユート達は町に着いて闘技場で戦う事になったのでした

さあ、リユート達はどこまで戦えるか？楽しみですね〜w

「なんか馬鹿にしてるような言い方だな？」

いえいえ？貴方達の実力が知りたいですから〜さあ、戦っちゃいましょう〜

「最初の相手は、普通の狼見たいよ？」

「狼？いきなりそんな野蛮な生物なのか・・・」

「野蛮でも何でも勝てばいいのよ？リユート」

「そうそう、やられなければいいのです」

「あんなあ・・・」

リユートは、呆れていました

そしてRMKチームの戦いが始まったとき〜

「行くわよ？私の魔法！火の盟約により、我に力を示せ！エレメンタルファイヤー！」

「食らいなさい！裁きの鉄拳！連打斬空翔！」

「おいおい！いきなりかよ！？」

リユートは、マジで驚いてました
それは何故かって？それはですね？

マゼンタとククルの攻撃により狼は黒焦げになったり、遠くに吹っ飛んだりしていたからなのでした
はっきり言って、むごいです、てかやりすぎ

「おーっと！マゼンタ選手、ククル選手！いきなりの攻撃に狼もノックアウトウウー！いきなりの先制攻撃により！狼は戦闘不能に陥った模様！R M Kチームの勝利イイ！フゥー！」

何なんでしょうか？このノリノリの司会者は？はっきり言ってうざったいかんじがします

「何か、何もしないで勝ったなあ」

「このままどんどん勝ち続けましょうよ」

「ああ、やれるとこまで行ってみるか」

リユート達は、何故かどんどん勝ち進みました

まあ、相手が弱いから勝ち進んだのは解ってますけど・・・なんか、無性につまらないですね〜

「五月蠅い！良し、次で決勝戦だな」

「商品は何かしら？魔術書とかだったら嬉しいわ」

「私は、何でもいいや」

リユート達が話していると司会者の声が、聞こえてきました

司会者Ⅱ「さあ！この大会の決勝戦の相手はあああ！な〜んとうううう！

年寄りの魔法使いだあああ！さあRMKチームは勝てるのか？さあ、バトルフィールドに登場だ！フォー！」

司会者がそう言うとな人の女魔術師がリユート達の前にやって来たのでした

その者は、白髪のお婆さんの姿をしていました。

「な・・・この老婆が決勝戦の相手？」

「まさか・・・」

「もしかして、謎の力とか使ってここまであがってきたとか？」

「違うわ・・・私は実力でここまで来ただけよ・・・それにしても・・・似ているわね」

白髪の老婆は、リユートに向かってそう言いました

「え？俺の事？誰に？」

「昔、一緒に旅をした仲間にな・・・」

「そうなんだ」

何、普通に談笑してるんですか？あの？解ってます？貴方達、戦うんですよ？

「その通り！さーあ！バトル開始だ！レディーゴー！」

司会者がそう告げると、リ्यूト達の戦いが始まろうとしていました
だが・・・

「その勝負！待った！」

「え？」

そう聞こえた瞬間、塀の一部が大爆発する
大爆発した後、そこから誰かやって来たのでした

「おーっと！乱入か？乱入は認めていないからとっとと立ち去り
なさい！」

「そんなもん関係ない！私は、その金髪の少年に用があるのだ！」

「え？俺？」

「そうだ、お前・・・勇者の末裔だな？我が名はキルデット、魔王
様の為、お前を殺す！」

「勇者の末裔・・・魔王!？」

それを聞いた老婆が、素直に驚いていました

「リユート、どうやら魔王の手先みたいね? やっつけとく?」

「もちろんだ! 何でやって来た奴に殺されなきゃいけないんだ!」

「了解、ぼっこぼこにしちゃいましょう」

「ここは、私に任せてね」

老婆は、そう言ってキルデットの前に立ちました

「ん? 何だ婆?」

キルデットがそう言った瞬間、老婆の持っていた杖が怪しく光りました

「今、婆って言いしましたね? うふふ・・・生きては返しませんよ」

うわ、この人物凄いオーラを放出してるよ!?!? まともに顔見れないって!

「な、何だ?」

「喰らいなさい、水の盟約により、我にチカラを与えたまえ・・・
エターナルアクアブルー!」

老婆の魔法により、い・ち・げ・きで遙か彼方にまでぶっ飛びました
はつきり言って凄すぎです

「うわ・・・むご・・・」

「す、凄い・・・」

「何者!?!? あのお婆さん!?!?」

三人は、本当に驚いています、まあ、当然ですよね

「あっけないわね? 私を怒らせたからよ・・・うふふふ」

老婆は笑顔でそう言いました
だからその笑い方やめてほしいです、怖いです、はい

「さあ、邪魔物は片付けたし、どうします？」

ナレⅡ老婆がそう言うのと、司会者がこう言いました

「今の衝撃で商品とかが消滅しちゃったので今回の戦いは、これで
終わりにしたいと思いますうう、優勝者も勿論いません！」

「え〜？」

「何か文句あるのですか？え？それともこの壊した建物の弁償、貴
方達がするんですか！」

「い、いえさいなら〜！」

リユート達は、結局

闘技場から逃げるように出て行ったのでした

「結局、商品出なかったな」

「あゝあ、出たけど意味無かったわね〜」

「これからどうする？」

「そうだな、とりあえず北に行ってみよう、てか、それしか情報ないし」

「そうね、じゃあ行きましょう」

結局。参加した意味無かったですね。リユート達は、とりあえず北に行く事にしました

それを遠くから見ている者がいました、それは・・・

「あれが、勇者様の子孫？・・・懐かしいわね・・・」

そう言って老婆は、懐かしんでいたのです・・・

く第六話く闘技場のバトルの巻く（後書き）

はい、ちなみにこの老婆、前作見ると分かるかと思います。

～第七話～謎の銅像発見の巻～

「なあ、ちょっと聞きたい事がある・・・」

「何よ？リユート」

「何ですか？」

「俺達は、魔王退治の旅をしている筈だよな？」

「そうよ？それがどうかした？」

「ここ・・・何処だ？」

リユートは、そう言いました

ちなみにリユート達のいる場所は、密林の中なのでした

「うゝん何処って言われても」

「はっきり言うと・・・ジャングルですね？」

「やっぱそうだろ!？何でこういう事になるんだよ!」

「え〜つと・・・」

何故、リユート達は密林の中にいるのか？と言いますと
それは数時間前の事

「ねえ？リユート」

リユート達は、北へ向かって歩いていると
マゼンタが話かけて来たのでした

「何だよ？マゼンタ」

「あれ見て？」

マゼンタは、何かを見つけたらしくリユートに言いました
リユートは、マゼンタの指した方向を見ると、そこには一つの大きい銅像が建っていました

「何でしょうか・・・あれ」

「さあ？でもなんかこういうのって怪しくない？何か秘密が隠されているようだしね？」

「確かにな・・・ちよつと調べてみるか？」

「そうしましょう？リユート」

リユート達は、銅像の近くまで行きました
近くまで来ると、その銅像の名前は、導きの像と書いてありました

「何か胡散臭い銅像だな・・・」

「そうですね？でも、私達は結局行き先は北って言うだけで何にも解決してないから、これに頼るのもいいかもしれないですね？」

「でもなあ」

「リユートにククル、これ見て？何か書いてあるわよ？」

「ん？どれですか？えーっと」

ククルは、銅像に書いてある文章を読み上げました

「この像は導きの像、この赤いボタンを押して行きたい場所を念じればその場所に連れてってやろうって書いてあります」

「ほんと？じゃあこれに頼みましょうよ、早速押すわね？」

マゼンタは、ポチっと素早く押したのでした

「ま、待て！いきなり押すなよ！？」

「えゝ？もう押しちゃったゝ」

リユート達の体が、光に包まれましたこうなれば異常現象？としか
思いませんねゝ？

「あ、まだ続き書いてありますよ？「但し、確立は50%なので、
ハズレても恨まぬようにって」

「何だとゝゝ！？うわあああ！」

リユート達は、その場からパッと消えたのでした
そして、気がついた時には、密林の中にいるのであったとき、あは

ははゝ馬鹿ですねゝ

「結局マゼンタのせいじゃないか！」

「そう怒らないでよ？ わざとじゃないんだからゝ？」

「どうするんだよ・・・こんな密林に来てさあ・・・」

「そうですね・・・どうしましょう」

「とにかくこの密林から、抜ければいいのかよね？ なら私に任せてよ？」

「おい・・・何する気だ・・・！？」

「え？ 何って、こ・れ・よ」

マゼンタは、一本の杖を用意して
呪文を唱えました

「や、やめろ！」

「もう遅いわwさあ行くわよ炎の盟約により、我に力を示せ！エターナルファイアー！」

説明…エターナルファイアーとは？エレメンタルファイアーの何十倍の威力であり
あらゆる物を焼き尽くすという恐ろしい魔法なのである！
なので、密林の木は一瞬で灰になったのでした

「これでOk」

「何がOkだろ！やりすぎだろ！？いくらなんでも！」

「でも、一本道ができましたよ？遠くに町が見えます」

確かにそうなのでした、密林の木の間に道が出来て遠くに町が見えるのでした、でもはつきり言うところ
自然破壊の極悪人ですよね？これが正義のパーティーというのでしょうか？

「もうどうにでもなれだ！」

おやゝ？ どうやら何か諦めてるって感じがしますね？
とりあえずリユート達は、町が見えるのでそこに行く事にしたのでしたとさ

~ 第七話く謎の銅像発見の巻く (後書き)

まだまだ続きますく

第八話　機械の町の巻

さてさて、前回、リユート達は変な像に導かれ密林にやって来たのでした

そして、町を発見したみたいですね？

「あ、あれが町だな？」

「そうね？リユート、でも何だか・・・」

「何だか・・・？」

「何か鉄の匂いとかするのよね？どうしてかしら？」

「あ、本当ですね？でも何なんでしょう？」

「とにかく行ってみようぜ？何か解るかも知れないし」

「そうですね」

リユート達は、町の中に入る事にしました

ちなみに町の名前は、「機械の町、サンジェント」と言うみたいです
機械の町って・・・何かすごそうですね

「機械の町、サンジェントかあ・・・」

「見てみて？リユート？ロボットが歩いてるわ!？」

マゼンタは、何かを発見したらしくリユートに言うのでした
確かに見てみると、銀色のロボットが二足歩行をしています
はつきり言って、すごいです

「凄いな・・・さすが機械の町、このぐらい当たり前なのか？」

「さあ？でも、歩くだけじゃ意味が無いわね？」

おいおい、何気に酷い事言ってますね？凄いロボットだと、思うん
ですけどね？

「ロボットを馬鹿にするな」

いきなりそう言う者がいました、リユート達は、声がした方向を振
り向くと、白衣を着た男が、立っているのでした
こいつ・・・科学者？かも知れないですね？

「お前は？」

「私の名前は、レジスト、この町、サンジェントで機械を作っている者だ、今、ロボットの事を馬鹿にしただろ！」

そう言って、怒っていました

あのくどうします？今にも襲い掛かって来そうな感じなのですけど？

「なあどうする？」

「そうですね・・・ここは素直に謝れば許してくれるのではないですか？」

「確かにな・・・それでいくか」

「私が言ったんだから、あやまるわね？」

「あ、ああ」

どうやら、リユート達は、謝る事に決めたようですね？

「おっっほっほっほ、すみませんっね？ 私たち、機械というのを見た事が無かったの？ 謝ったんでっ許してくれますっ？」

何？このキャラ？って思わせるような感じに、マゼンタは言いました、それを聞いたレジストは

「おい・・・何か謝り方が、馬鹿にしてるように聞こえるのは気のせいかな？」

いえいえ気のせいでは無いと思いますけどね？てか、馬鹿にしてると思いますね？私は

「ま、謝ったならそれでいい？それで、君達は、何しにここに来たのかな？」

レジストは、そう言いました
リユート達は、こう言いました

「道に迷って、たまたまここに着いたんだ」

「そ、そうなのです」

「おゝっほっほっほ、私達が来ちゃいけない事もあるのですの？」

マゼンタは、どうやらこの話し方に決めたみたいですね？
はつきり言って、エセお嬢様って感じかな？

「いけない事？別に無いが？ただ聞いたただけだ、で、どうだ？この町の感想は」

レジストは、そう言いました
リユート達は、こう答えました

「そうだな・・・何ていうか、凄い町だな」

「鉄の匂いとかして、嫌な気分もしますが、いい町ですね」

「まあ、私にとっては、この町はどうでもいいって感じですよわ」

「見事に意見がバラバラだな・・・まあいい私は用があるので、失礼する」

そう言って、立ち去ろうとすると爆音が聞こえてきました

「ん？何だ！？き、機械が破壊されてる！？」

レジストは、粉々になった機械を見て、驚きました
そして、それを破壊した人物を見て、驚きました

「な・・・何だお前は！」

レジストの見た人物は、上半身が狼
下半身が人間の、変な姿？だったから驚いたんですよね？
普通、こんな奴、いませんって絶対

「お、お前・・・レーター？・・・生きてたのか？」

「む、そこにいるのは勇者の末裔か！あの時はよくもやってくれた
な！仕返しをしてやる！」

「いや、ていうか・・・俺の剣技で消滅したのに何故生き返ったん
だ？」

「・・・・・・・・・・神様のおかげ？」

何を言ってるのでしょうか？どうやらレーターにも、生き返った方
法が、解らないみたいですな？

「まあそんな事はどうでもいい！勇者の末裔達よ！成敗してくれる！」

そう言って、レーターは、襲い掛かってくるのでした

「リユート！戦いましょう！そしてもう一度、再起不能にしてやりましょうよ！」

「まあ、いるって事自体が嫌だしな？こいつの場合・・・よし、やってやるぜ！」

「私もお手伝い致します！リユートさん！マゼンタさん！」

ナこうして、再びレーターとの戦いが始まったのでした
はたしてリユート達は勝てるのか？それは解りませんね
その光景を見ていた、レジストはこう言っていました

「こいつ・・・機械の敵！許さん！」

そう言って、何処かへといなくなったのでありましたとき・・・

く第八話く機械の町の巻く（後書き）

まだまだ続きますく

〈第九話 機械の町の戦いの巻〉

さてさて、前回、何故か復活したレーター

それと戦う羽目になった、リユート達、さあ、この戦い、一体どうなるのか？

まあ、結果は見えてるように思いますけどね？

「おい、何か失礼な事を言っただよな？」

いえいえ何も言ってないですよ？貴方の聞き間違いですって
まあそんな事は置いといて、リユート達はレーターと戦います

「いくわよ？今度こそ、完全に滅ぼしてやるわ！おっっほっほっほ」

あゝ？言ってる事が、邪道なんですけど？

「やってみろ！この前見たいに、そう簡単には、やられんわ！」

レーターは、手に何か装着しました

「それは・・・鍵爪？」

「ですね・・・でも、色が・・・」

リユート達は、レーターの装備した物に驚きましたまあ当然です、だって、鍵爪の色ってやっぱ銀色？と思うのに何故か緑色です、はつきり言ってそれで切られたら嫌な感じがします、はい

「ふっふっふ、これに驚いたか」

いや、誰だって驚きますよ

「うん、確かに驚いた、けど・・・」

「それでやられる訳にはいきませんわ!」

「私達はこんな雑魚にはやられたりはしません!」

あゝ? 何気に酷い事言ってますか? あ、ほら怒ってるし

「てめえら! やっぱ許さん! 喰らえ! シザーズガウン!」

レーターは、緑色の鍵爪で空を切り裂きました
そしてそこから、カマイタチが発生して、リユート達に襲い掛かって来ました

「うわ！」

「リユート！危ない」

リユートは、カマイタチを喰らいそうになりましたが、マゼンタの魔法で何とか避けられたのであった

「っち、避けられたか」

いや、誰だって痛い思いはしたくないし、避けられるんだったら避けると思うけど？

「よくもやったな！やっぱり再起不能にしてやるぜ！」

「その意気よ！リユート、さあこいつをぼっこぼこにしちゃいますわ！」

「そうですね、こんな変人、さっさと倒しましょう」

リユート達がそう言っていると、リユート達の所にやって来る者がいました

「待て！こやつは、私が倒す！」

そう言ったのは、レジストでした
レジストは、何か機械に乗っています

「ん？普通の人間ごときに、この俺が倒せると思っているのか？」

「倒せるさ、科学の力があればな？ いけ！戦闘ロボ、イレイザー君
！」

イレイザー君と呼ばれたロボットは、蒸気を出して動き出した
そして、レーターに向かって

「ミサイル全弾発射！」

「み、ミサイル！？」

「何、考えてるんだ！」

確かにそのとおりですよね？だって、ミサイルなんか撃ったら町

なんて壊滅しますって

「うわ！やめろ～～～！」

「行け～～！機械を壊したこいつを、滅ぼすのだ！」

イレイザー君は、レジストの言うとおりにミサイル発射態勢に入りました

「おい、マゼンタにククル！ここは危ない、逃げるぞ！」

「了解、爆発に巻き込まれたくないわ」

「そうしましょう、行きましょう！」

リユート達は、そう言って町から出て行く
そして数秒後

「このままでは、終わってたまるか～～～！」

そんな声が聞こえた瞬間、大爆発しました
もちろん町は跡形もなく残っていません、まあ当然か

「大丈夫でしょうか・・・あそこには沢山の人が」

「いや、それは無いと思う、町の中を見ても、人がほとんどいなくて

ロボットがいっぱいいたからな、もしかしてあいつが町長でたった一人の住人なんじゃないのか？」

「これからどうする？リユート」

おや？マゼンタの口調がいつものように戻ってますね？
きっと、お嬢様風はあきたのかな？

「そうだな、とりあえず他の町で魔王の情報でも探すか
魔王退治の旅をしてるしな」

「そうね」

「そうしましょう」

リユート達は、魔王退治の旅を続ける事にしたのでした
一方ミサイルの直撃を受けたのに、何故か無事だったレジストはと
言うところ

「全部無くなっちゃったけど、ま、いいか、私の町だし、また最初から作り直すか」

お前の町だったんかい、ていうか？何故生きてる？

レジストは、再び機械作りを始める事にしたのであったとさ・・・

く第九話く機械の町の戦いの巻く（後書き）

まだまだ続きますく

〈第十話 試練の巻〉

さてさて、前回、リユート達はレジストの作った機械

イレイザー君のミサイル攻撃にあい、町から逃亡したのでした
うーん、ミサイル攻撃はやっぱり災難ですよね

「しょうがないだろ！いきなりだったんだから！」

まあそれは置いといて、リユート達はとりあえず北に向かっている
のでした

北に向かうと、大きな滝が見えました

「あ、滝だな」

「そうね？リユート」

「あ、なんか立て札に書いてありますよ？」

「ん？何だ？」

リユート達は、立て札を見るのした
立て札には「修行の滝、己の精神を鍛えるのじゃ！」と書かれてあ

りました

「何だ・・・これ」

「さあ・・・私には解りません」

「きっと、これは・・・新しい技とか覚える修行場って事？」

何を言ってるのでしょうか？修行場だったら、道場とか建物の方がいいと思うんですけど？

「で、リユート、どうする？ここで力つけとく？来たるべき戦いに備えて」

「私も、武術の訓練になりそうですし、やりましょうよ？リユートさん」

「そうだな・・・じゃあ、やってみるか」

リユート達は、修行の滝で、修行をする事にしたのでした
でも、一つ思う事があります、どうやって修行するのでしょうか？

「そう言えば、どうやって修行するんだ？」

「あ、リユート、見てみて？立て札の裏に何か書いてあるわ」

「ん？何々・・・」「己を鍛える者、土の中に埋もれているボタンを押すべし」って書いてあるな」

「土の中のボタン？」

「あ、これのようね？」

どうやら、マゼンタは、土の中に埋もれているボタンを見つけたみたいですよ

「なあ、な〜んかやな予感すんだけど」

「・・・大丈夫、ぽちっと」

ナレⅡマゼンタは楽しそうにボタンを押しました
すると・・・ちっとも大丈夫じゃなかったのでした
いきなり、リユート達が立っていた所に大穴があいて、落っこちた
のでした

うゝん、災難ですな

「ほら、やっぱりゝゝゝ！」

「こうなる事は予測してなかったわよ！」

「きゃゝゝゝゝ！」

リユート達は、どんどん落ちていくのでしたとき
これでこの旅も、ジ・エンド？なんかつまらないですね？

「勝手に終わりにするな！」

おや？どうやら生きてみたいですね？
リユート達は、地下の空洞にいました

「何とか助かったのはいい、けど暗くて何も見えないな・・・何を
触ってるのかも解らないし」

「りゅ、リユートさん、そこは・・・」

「え？あ、いや・・・見えないから、ごめん」

「い、いえ・・・」

「こうなれば私の魔術の出番ね？光の眷属たちよ、辺りを明るく照らして！ラジエント！」

マゼンタの魔法で、辺りに光の球体が多数出現して
辺りを明るく照らし出したのでした

「これでよし」

「よし、じゃないだろ！あちちち！」

「え？あ・・・ごめん」

リユートに光の球体の一つが、くっついていたのでした
災難ですね？あははは

「笑うな！」

「あ、リュートさん、マゼンタさん、ここになんか書いてありますよ？」

ククルは、壁に彫られた文字を見つけたのでした

「え？あ、ほんとね？えーっと、「ましれんをまのりこえてまちょうじょうにまいくべしま」まぬけだ、何？これ？古代文字？」

多分違うと思いますけど？

「暗号になってるんじゃないか？よく読んでみると解る気がするんだがな？」

「あ、私、解りました、「ま」を抜いて読めばいいと思います」

「じゃあ、まを抜くと、「試練を乗り越えて頂上にいくべし」か、試練って何だ？」

「さあ・・・そこまでは」

「でも、そうしないと地上に戻れないのでしょうか？じゃあやりました

ようよ？ぱわーあつぷのチャンスでもあるわ」

「そうだな、結局試練を乗り越えないと、ここから出られないからな？よし、やるぞ！」

「了解！私がんばります！」

こうして、リ्यूト達の何だか解らない試練が始まろうとしていた
のでしたときw
でも、何をするのでしょうかね？やっぱ試練は、敵を倒すとかかな？

リ्यूト達の戦い？始まろうとしていたのです・・・

第十話 試練の巻 (後書き)

まだまだつづきます

〈第十一話 試練の続きの巻〉

さてさて、前回、リユート達は滝について、そこで試練を受ける事になったのでした
一体何の試練をやるのでしょうかね？

「さあ？」

「どうする？リユート、とりあえずここから脱出しないと、魔王退治が出来ないわよ」

「そうだな、まず地上に出る事にしよう」

「あ、何か見つけましたよ」

ククルは、何か見つけたようです
リユートとマゼンタは、それを見ってみました

「えーっと、第一の試練、”ここにあるボタンを押して、クリアーするべし”何だこれは？」

「さあ？まあ、とにかく押してみましようよ？えい」

マゼンタは、何も迷わずポチっと押しました
ボタンを押すと、ボンッと煙が発生しました

「げ・・・な、何も見えない」

「リユートさん、マゼンタさんどこですか」

「ね、ねえ・・・リユート」

「何だ」

「さっきから私の腕に何か引っ付いているんだけど・・・煙で何も
見えないの・・・」

「そうか・・・この煙を消せばいいんだが、マゼンタ、魔法で出来
るか？」

「無理言わないでよ！そんなの出来るわけないじゃない」

で？どうするんですか？何か方法があるのかな？

「とりあえず・・・やって見るか・・・はあああ」

リユートは、剣を構えて、回転しました

「秘剣！回転乱舞！」

あゝ？何も見えないのに、剣でぐるぐる振り回したら、危ないのでは？

まあ、そんな事はお構いなしに、リユートは物凄い勢いでぐるぐる回ると、その剣圧で煙は消えたのでした

「何とか見えましたね・・・って！マゼンタさん！」

「え？何・・・って・・・きゃゝゝゝ！」

マゼンタは叫んだのでした、それは何故かって？それはですね？

両手に緑色の蔓が巻きついているからですよ！しかも

顔つきの大きな花が咲いてますし、はっきり言って化け物花ですね

「リュ、リユート！切って！お願い！」

「解った！とりゃあ！」

リユートは、剣で化け物花を真っ二つに切り裂いたのです。すると、何故か宝箱が出現しました、RPG風？

「何で、宝箱が？」

「さあ？でもありがと、リユート」

「どうってことない」

「で、どうします？この宝箱・・・開けてみます？」

「そうだな・・・」

「宝箱って事は、お・た・か・らに間違いないと思うから、開けましょうよ？」

「・・・罠かもしれないぞ？だって化け物花から出たからな」

「そうですよ、でも・・・何が入ってるのか気になります・・・」

「じゃあ、どうする?」

「そうだな・・・とりあえず地上に持っていくまで、開けないでおう」

「そうね、そうしましょ」

結局、開けないで持っていく事にしてみたいですねゝでも、どうやって地上に出るのでしょうか?

「あ、リユートさんマゼンタさん、さっきのボタンがあつた場所に道がありますよ?」

「あ、ほんとだ、どうやら上に続いているみたいだし、行こう」

「了解」

「はい、解りました」

リユート達は、先に進む事にしました
先に進んでいくと、石作りの部屋に辿り着きました

「何にもない部屋だな・・・」

「あ、リユート、壁に文字が書かれていますよ?」

「あ、ほんとですね?これも暗号になっているみたいです」

「どれどれ”せおをべかうがちがろい、ばれけたみすすにきさ”何だこれ?」

「さあ?でも、何かをすれば先に進めるって事よね?」

「こ、これはむずかしいですね・・・一体どうすれば・・・」

リユート達は、考えるのでした

しかし、解らないようですね?ここで旅は終わりになるのか!??そうになると、生活出来ないから強制げくむおくばくってなりますねこれからどうなるのか?それはまだ、解りませんでしたとさ

ゝ第十一話ゝ試練の続きの巻ゝ（後書き）

まだまだ続きますゝ

第十二話　最後の試練の巻

さてさて、前回、リユート達は、滝に着いて試練を受ける事になったのでした

そして、暗号が書かれている部屋にたどり着きます

暗号は、”せおをべかうがちがろい、ばれけたみすすにきさ” って書いてあります

一体、どうするんですか？

「どうするって・・・解いて先に進むしかないだろ」

「でもどうする？リユート、この暗号結構難しいわよ？」

そうですね？以外に簡単だと思うんですけど

「あ、解りました、この文字を反対から読んで見ればいいんですよ」

「反対から？反対から読むと、”さきにすすみたければ、いろがちがうかべをおせ” つまり」

マ「色が違う壁を押せて事ね？えーっと色が違う壁・・・あったわ、えい」

マゼンタは、色が違う壁を押しました

すると、壁の一部がへこんで、壁が壊れて道が出来たのでした

「よし、何とかクリアしたな、先に進むぞ」

「お」

「了解です」

リユート達は、先に進みました

そして、先に進んでいくと、一つの魔方陣がありました

「何だ？これ」

「こ、これは・・・」

「マゼンタ？何か知ってるのか？」

「本で読んだ事があるの、何処かに個人の能力を数倍にパワーアップ出来る魔方陣があるって・・・まさか、こんな所にあったとはね？」

「じゃあ、ここに足を踏み入れれば前よりパワーアップするって事ですか？」

「そういうこと、早速入りましょう？」

「・・・強くなるならいいか」

「そうですね」

リユート達は、魔方陣に足を踏み入れました
すると、何故か紫に光りました、十分怪しいですよ？何？紫って？
普通なら黄金とか真っ白に輝くはずなんですけど、紫って

リ「おい・・・本当に大丈夫か？」

「さあ？私も本で見ただけだから、安全とは解らないわ」

おいおい、何て無責任な

少し時間が経つと、紫の光は消えました

「おい・・・強くなったのか？」

「さあ・・・でも、何か強いパワーを感じるのよね？ちょっと魔法をぶっ放してみるわね？」

「おい、俺を実験にするなよ？」

「えー・・・ま、いつかWじゃあ天井に向かって、火の盟約により、我に力をしめせ！エレメンタルファイヤーー！」

マゼンタが、魔法を使った瞬間

杖から、物凄い威力の火炎が出たのでした、はつきりいってすごすぎです

だって、天井跡形もなく吹っ飛んでるし、凄い地下まで落とされたのに、青い空が見えるのですからね？

「あはは・・・強くなったみたい」

「この威力を俺に向けようとしてたのか！？助かったぜ・・・」

「でも、どうやら強くはなったみたいですよ？」

そうですね？まるでスーパーな？人ですからね？

「でも出口は見えたな？強くなったし、外に出るか」

どうやって？貴方達は、空なんか飛べませんよ？

「私に任せて下さい、いきます！、竜巻連打翔！」

ククルの技によって、石の階段が出来上がりました
あんた何者ですか？凄いですよ？ほんと

「はい、完了です」

「これで何とか外に出られそうだな、じゃあ行くぞ！」

「OK」

「はい！」

こうして、無事？リユート達は、試練をクリアしたのでした
でもいいのですかね？よく考えたら色んな物を破壊した気がします
けどね？

リユート達は、外に出て、魔王退治の旅を続ける事にしましたとさ

〈第十二話〉最後の試練の巻〈後書き〉

まだまだ続きます

ちなみにリユートは、強くなったのか？それはまだ不明って事で・・

・
w

第十三話　謎の女剣士登場の巻

さてさて、前回、リユート達は、滝の試練をクリアして魔王退治にと行くのでした、でも一つ気になる事があります魔王は、ど・こ・に・い・る・の・で・し・ょう・か・ね・？

「それを知ってれば早速退治に行ってる！」

「でも、本当に何所にいるか、解らないのよね・・・」

「あ、でも町が見えましたよ？あそこで、情報を聞いて見ましようよ？」

「あ、本当だ、そうだな、とりあえず情報を聞いてみるか」

リユート達は、どうやら新しい町に辿り着いたみたいですね？その町の名前は、「クリーネア」と言うらしいですリユート達は、何も迷いもなく、クリーネアに入りました

「何か、殺風景な町だな」

「そうですね？あ・・・ちょっとククル」

「何ですか？マゼンタさん」

おや？マゼンタは何かを見つけたようです、マゼンタはククルにひ

そひそ話をしました

（ねえねえ？ククル、あそこに見えるの何だと思う？）

（え？あ・・・あれは、「美肌効果あり高級温泉」ですね？温泉ですか）

（リュートをほっというて一緒に行かない？）

（え？でもいいんですか？）

（だって、どっちみちリュートは入れないし？ほら）

マゼンタは、何かを指差した
ククルは、その方向を見ると、立て看板に「男禁女専用」と書いてありました

（あ、ほんとだ、でも・・・お金ありますでしょうか？高級って書いてありますし）

（それは大丈夫、私にいい手があるからね？じゃ、早速行きましょうよ？）

（そうですか、リュートさんには悪いですけど、私も入りたいです

し、一緒に行きますね？)

「さっきから、二人で何こそそと話してんだ？」

「実はね？私達、女性専用のいい場所を見つけたの、だからそこに行こうと思ってるのよ？」

だから、リユートは、この町を探検しててくれない？」

「そうか、ま、別にいいぜ、この町の事、よく知らないし、とりあえず色々回って見る」

「了解、じゃあ、数時間後にここで待ち合わせね？じゃあね？リユート」

「私も行きますので、失礼します」

おや？どうやら二人とも、温泉に向かったようですね？

リユートは、どうするのかな？

「どうするって、この町を見て回るだけだ」

リユートは、そう言って、町の中を歩きまわるのでした
そして、リユートは町を見ていてこんな感想を言うのでした

「それにしても、この町は温泉が盛んなんだな？美白の湯に苦しみの湯？薔薇の湯に兄貴の湯・・・変な湯もあるな・・・」

確かにそうですね？何ですか？兄貴の湯って？
あつたら怖いですよ

「貴方・・・剣士ですか？」

「え？」

いきなりリュートに話かけて来る者がいました
リュートは、驚いて振り向くと、そこには一人の女剣士がいました

「うーん、どうだろ？確かに剣士って言えば剣士かな？一応剣持ってるしな」

「じゃ、じゃあお願いがあります、私のお願い聞いてくれませんか？」

「お願い？何だ？」

「実は、倒したい者がいるんです、私一人じゃかなわなくて・・・だから手伝ってくれますか？ちゃんとお礼致しますから・・・」

「ん・・・どうしようか、まあ腕試ししたいし、いいぜ」

「ありがとうございます、私の名前は、ガネットと言います、貴方は？」

「俺は、リユート」

「リユートさん、よろしくお願いいたします、では奴がいる所まで案内しますね」

「解った」

「どうやらガネット一緒に何者かと戦う事になったみたいですね？さて、これからどうなるのか？それは、まだ解りませんでしたとさ一方、マゼンタとククルはというと」

「ひっろーい」

「ごーじゃすですねー」

どういった手に入ったかは謎ですが
二人とも、温泉に浸かって大はしゃぎでしたとき

く第十三話く謎の女剣士登場の巻く（後書き）

まだまだ続きますく

第十四話　ダンジョン攻略の巻

さてさて前回、リユート達は温泉が盛んな町「クリーネア」に辿りつきました

そこで、ガネットと言う女剣士と出会い、依頼されたので一緒に戦う事になったのでした

でも、リユートって、ほんとに強いのですかね？　いっつも戦ってませんか

「五月蠅い！俺は、一応訓練とかしたんだよ」

ほんとですかね？　ま、それは置いといて

リユートは、ガネットに案内された場所に辿りつきました

「ここは？」

「ここは、奴がいる場所です・・・この青い建物の中に最近住みつききました・・・」

その場所は、青い建物でした

扉は無く、一言で言うところ、ダンジョンの入り口って感じでした

「もしかして・・・この中に行くと、地下に続く階段とか、モンスターとか出るのか・・・？」

「ええ、そうですよ？何で解ったんですか？」

「いや、解るって、誰が見たって」

そうですねー扉がついていない家なんて、泥棒入り放題ですしねーそれに、中からうめき声とかも聞こえますし、やっぱりダンジョン？って感じですし

「と、とにかく中に入って、ボスを倒せば良いって事だな？」

「はい、よく私の言おうと思っていた事が解りましたね？もしかして・・・超能力者ですか？」

「はい、俺は世紀の大魔術者ーって、違う！俺は・・・一応勇者だ」

おや？リユートは、つつこみを覚えましたね？
なかなかいいですよ、そのつつこみ

「五月蠅い！」

「勇者・・・？もしかして・・・」

「もしかして？」

「あの、ドラゴンを一撃で粉碎したり、すざましいパワーで天候すら変えるというあの伝説の？」

「おい・・・なんかその伝説・・・間違っていないか・・・？」

確かにそうですよね？それにドラゴン？いるのですか？

見た事ないけど？それに天候を変えるとかいうと、物凄い奴ですよ？
てか、勇者じゃなくて神に近いですね、それやったら

「と、とにかく中に入ろうぜ、そしてラスボスを倒す」

「そうでしたね、忘れてました、では、行きましょう」

こうして、リユート達は、青い建物の中に入る事にしたのでした
建物内

建物の中は、薄暗く、いかにもモンスターって奴が出てきそうな
感じなのでした

「あ、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「はい？何でしょうか？」

リ्यूトは、ガネットに尋ねました

「ちなみにラスボスってどんな奴だ？」

「ラスボスですか？そうですね・・・上半身は獣、下半身は人間という、まさに化け物って感じの奴ですよ」

「何か・・・どっかで見た事ある奴のような・・・」

確かに、多分あった事あると思われそうですよ？

「けど、思い出せない、ま、いつか」

ええー！？忘れちゃったんですか？

酷い人ですねー、ほら、あの人っていうか、あの野獣ですよ？

「??:」

たく・・・、ま、ここは会ってからの楽しみって事にしましょうかね・・・

「あ・・・なんかやって来ました」

ナレIIガネットがそう言うのと、確かにやって来ましたその姿は、まるでゼリー状の化け物って感じです
顔が付いていたら、可愛く見えるかも知れないけど、顔はついていませんでした

「これ・・・敵か？」

「敵ですよ、さっやっつけましょう」

「あ、ああ・・・（なんか調子狂うな・・・）」

リ्यूトは、そう思っていました
そして、ゼリー状の化け物と戦う事になったのでした

「いきますよ」

ガネットは、腰に差していた剣を引き抜いて
手に持った瞬間

「うらあああ！雑魚がー！あたいに適うと思ってんのか！この下等生物めええ！食らえ！」

「え？」

ナレリュートは、驚きました

だってそうですよね？さっきまでのほほんとした感じがこんなに豹変するんですからね？

「はっはっはっは！らくしうだぜ！たくもつと強い奴いねえのかよ、あたいの相手にもならないぜ？ふっ疲れた・・・」

「・・・」

ガネットは、そういつて剣をしまうと
こういいました

「あれ？リュートさん、どうしました？っていませんね？敵・・・
もしかして、リュートさんが倒したんですか？」

「え・・・覚えてないのか？」

「はい、もしかして私がやったとか？でも・・・私にはそんな力は無いですし、リュートさんが倒したんでしょう？」

「おいおい・・・」

リユートは、こう思いました

こいつ・・・二重人格者かって・・・

そう思ったのです

そして、リユート達は奥へと進む事にしたのでありましたとさ

第十四話 ダンジョン攻略の巻 (後書き)

まだまだ続きます

第十五話　ダンジョンの敵の巻

さてさて、前回、リユート達は青い建物のダンジョンに入ったのでした

そこで、ガネットの事をよく知ったのでした
二重人格・・・おっそろしいですね

「確かに・・・変わった後、何も覚えてないっていうのな・・・」

「何か言いました？リユートさん」

「いや、何も？それより・・・このダンジョン・・・もしかして」

「もしかして？」

「地下に続く階段とか、トラップとかあるか？」

「ありますよ？何で解ったんですか？」

「おや？即答されましたね、まあ、ダンジョンとはそういうもんです、はい」

「おいおい・・・てことは、一番下にラスボスがいるってか？」

「そうです、ちなみにこのダンジョンは、地下三階まであります。早速階段を探して、ラスボスをやっつけましょう。」

「しょうがない・・・行くか」

「おや？どうやらリユートは嫌そうですね？」

「ま、トラップとかあって地下に行かなくちゃならないから、めんどくさいですからね」

「五月蠅い！」

結局、リユート達は、地下に続く階段を探しました
そして・・・

「あ、階段ってこれか」

「そうです、さあ早速行きましょう」

階段を見つけて、降りると待っていたのは

「おい・・・いきなりモンスター満載じゃねえか・・・」

「た、確かに・・・どうします？リユートさん・・・」

そうなのでした、階段を降りて地下二階に着いた途端
ゼリー状のモンスターがわんさかいたのでした、しかも戻ろうとし
ようとしても

モンスターがいるので逃げられません、絶対絶命って奴？

「いや、こういう場合・・・うゝん」

リユートは、考えました
そして

「ガネット、剣を抜いてくれ」

リユートは、そう言いました

「はい？わかりました」

ガネットは、リユートに言われて剣を引き抜きました
すると？

「あん？何だ？こいつら、雑魚ばっかじゃねーか？あたいが纏めて始末してやってやる！〜てりゃ〜！」

相変わらず元の性格がなくなってますね〜はつきり言って別人ですよ
ガネットは、モンスターを全て破壊しました

「弱いぜ・・・つえ〜やついね〜のかよ？あたいが相手になってやるのにな？」

「だったら、地下三階に強い奴がいる」

リユートは、そう言いました
それを聞いたガネットは

ガネットⅡ「そうか、ならあたいが倒してやるぜ〜！うおおおお！」

ガネットは、いきなり走り出して

地下へ続く階段を見つけに行ったのでした

そして、階段はすぐに見つかり、リユートとガネットは地下三階に行きました

「ここにいるのが、ラスボスらしいが・・・あ、お前」

リユートは、何かを見つけたようですね？

「お前・・・レーターじゃないか、何でいるんだ？」

「な！勇者一味！何故ここに！」

「聞いているのはこっちだけど？」

「俺は、ここで修行してたのだ、お前ら勇者一味を倒すためにな？
ここであつたが百年目、勇者・・・覚悟！」

百年って・・・百年も経ってないけどね？

「待ちな！お前の相手は、あたいだ！邪魔するんじゃないよ！」

ガネットは、そう言うと、剣を構えてレーターに突っ込みました

「な、何だお前！ぐは！や、やめ！ぐおおおおお！！！」

ガネットは、無差別に攻撃しています
はつきり言って、酷いです、はい

「これはチャンスか？俺も加勢するぜ！」

リユートもそれに加わって攻撃しました
こうなればリンチですよ？リンチ

「く・・・俺は死にはしない！あの人の名にかけて！」

何を言っているのでしょうか？レーターは、傷つきながらこう言いました

「く・・・ここは、退却だ！覚えていろ！」

そう言って、レーターは消えました

「別に覚えたくないけどな？」

「よっしゃあ！あたいの勝利〜！」

そう言って、剣をしようと

「あ、あれ？終わったんですか？リユートさん」

「ああ・・・今な、ラスボス・・・簡単にやっつけた」

「そうですか、ありがとうございます」

あのくどちらかといえば、ガネットがやっつけた感じなんですけど？

結果的には、レーターはいなくなったけどね？

レーターを倒した後、地上に出て

ガネットはこう言いました

「私の依頼、手伝ってくれてありがとうございます、じゃあ、私はちょっとやる事があるので、ここでお別れです、さようなら」

そう言って、ガネットはリユートから離れて行きました

「用って何だ？ま、いいか、そろそろマゼンタとククルと合流するかな・・・」

リユートは、そう言ってマゼンタとククルとの待ち合わせ場所に行く事にしたのでした・・・

一方その頃ガネットは

「どうです？ 私、ちゃんと倒しましたよ？ では、賭けの代金よろしく」

おや？ どうやら？ 賭けをしたみたいですね
ガネットは、賭けに勝ったので、お金を貰っていたのでしたとき

〜第十五話〜ダンジョンの敵の巻〜（後書き）

まだまだ続きます

第十六話　魔王とその部下の巻

さて、ここは何処かの場所

ここに魔王と呼ばれる変な人がいました

「こら、だゝれがへ・ん・な・ひ・とだ！ 我は魔王、この世界を暗黒に導く者だ！」

えゝ？ どう見たって変な人ですよ？

だって、自分で魔王とか名乗っちゃってるし、我って言ってるし？

「まあまあ、そう怒らないの、魔王」

おや？ 魔王に話しかける者がいますね？

「ナナ！ 貴様、我の事は魔王様だ！ 呼び捨てにするな！」

「別にいいじゃない？ でもね？ そんな事言ってもいいのかな？」

「な、何だ・・・」

「いや、別に？ ま、それは置いといて、魔王はこれから何かやるの？」

「我か？ 我はだな・・・ふっふっふ」

「？」

いきなり笑い出したよ？この人、やっぱ変人ですね

「五月蠅い！我はこれから魔力を蓄える事にする、ナナ、貴様に勇者の一味を滅ぼす事を命じる」

「はーい、わかりました」

「本当に解ってるのか・・・？まあいい、我はこれで消えろとする」

そう言って、魔王はその場からぱっと消えたのでした

「勇者の一味ねー？早速退治しに行って見よう」と

そう言って、ナナはリユート達の所に向かうのでした・・・
一方その頃リユート達と言うと

「お待たせ、リユート」

「お待たせです」

「ああ」

リユートは、マゼンタとククルに合流しました

そして、温泉の町クリーネアを見て回る事にしました

歩いている途中、マゼンタがリユートにこう聞きました

「ところで、私とククルが温泉に入っている間、リユートは何してたの？」

「俺か？俺は・・・まあある人と出会って、バトルとかしてたかな」

「はあ？バトル？この町にモンスターとかいたの？」

「ああ、ゼリー状みたいなやつと、レーターがいた」

「ええ？じゃあ、倒したの？」

「まあな」

リユート達が、そんな話をしていると、リユート達に話かけて来る者がいました

「みくつけた！貴方達が勇者一味ね？」

「ん？誰だ」

「あのく？私達に何の用ですか？」

「私はナナ、一応魔王の手下、よろしく」

（なんかえらくフレンドリーな奴だな・・・）

リユートは、そう思っていました
さすがにマゼンタとククルもどうしようか迷ってます

「ど、どうします？リユートさん」

「そうだな・・・魔王の手下らしいし、倒しとくか？」

「そうね・・・」

リユート達が相談していると、ナナはこう言いました

「い・ち・お・う、私は貴方達を倒しに来たの、だ・か・ら、いきまゝす」

ナナは、手にカードを装備して、こう言いました

「食らえ、ストレートフラッシュ！」

「な、何だ？カードが向かってくる！」

ナナの投げたカードが、垂直に並び襲い掛かって来ました

「私に任せて！火の盟約により、我に力を示せ！エレメンタルファイヤー」

マゼンタの魔法で、カードは消滅したのです
それを見たナナは

「んゝ・・・今日の所は、これぐらいにしといてあげる、じゃねゝ」

「は？」

ナナは、パツと姿を消したのでした

「結局、何だったんでしょ・・・」

「さあ？でも、また新しい敵が現れたって事は確かだな・・・」

本当に何だったのでしょうか？

リユート達は、そう思っていたのでした

「あゝあ、失敗だったな・・・今度は別の手を考えよつと、でも・・・
・なゝんか好感持てたのよね」

ナナは、リユート達から離れた場所にて、そう言っていたのでした・・・

く第十六話く魔王とその部下の巻く（後書き）

まだまだ続きますく

第十七話　勇者と敵の戦いの巻

さてさて前回、リユート達は、新しい敵と出会ったのでした
そして、今は草原を歩いています、でも一体何所に向かっている
んでしょうね？

「そんなの知るか、こっちに邪悪な気配がすると言ってたから向かって
いるんだ」

それじゃいつまでたっても、魔王の所には辿り着けない気がするけど
ね

「だったらどうしたらいいんだ！」

「そうよね・・・とりあえずこっちで合ってるのかも疑問だしね」

「確かにそうですね」

「でも、何も情報無いから、行くしかない」

結局、リユート達は北の方向に向かいました
北の方向へ歩いていくと、砂漠が見え始めました

「あ、砂漠だな・・・」

「ほんとね？遠くの方に何か見えるけど、あそこに行ってみるか」

「そうだな・・・他に行く所無いしな、とりあえず行ってみるか」

「そうですね、早速行きましょう」

リユート達が歩いていると、前から誰かやって来ました
それは・・・

「見つけたぞ、勇者の末裔ども！」

毎度お馴染み、変人獣人のレーターでした

「おい、誰が変人だ！」

だって、何回も復活してるし？はっきり言ってゾンビだしね？

「また、お前か・・・何しに来たんだ？」

「何しにだど？決まっている！お前らを倒しに来たのだ！」

「やっぱり？どうする？リユート？相手する？」

「そうだな、今回は俺が戦ってみる、いつもククルやマゼンタにまかせつきりだったから」

「そうですか、リユートさん、絶対に負けないで下さいね？」

「負けても回復してあげないわよ？回復魔法覚えてないし？」

「おいおい・・・ま、こんな奴に負けたら旅してる意味無いもんな」

マゼンタさん何気に酷い事言ってますね？でも、初めて、一人でリユートが戦う事になったみたいですね？リユート勝てるのかな？まゝ解りませんけど

「俺が、こんな奴に負ける筈が無いだろ！」

何気に酷い事言ってますね？あ、ほら、レーターの奴顔を真っ赤にして怒ってるし

「こんな奴だと？許さん！倒す！覚悟しろ！喰らえ！獣狼波！」

説明、獣狼波とは？爪で空を切り裂き、相手にダメージを与える

まあ、爪でひつかくを豪華に言ってるだけですね？

「そんなの・・・簡単に避けられるな」

そうなのでした、リユートは、かゝんたんに避けました
そりゃ避けられるでしょ、だって一直線にしか攻撃してないからです
すねゝ

「く、なかなかやるな・・・」

あのゝ何言ってるんですか？リユートは、何もやっていないんです
けど？

「今度は、こっちから行くぞ！とりゃあ！食らえ！十文字斬！」

リユートは剣を持ち、十字に切り裂きにかかったのです

「前と同じ手を喰らうか！獣狼波！」

「何！」

リユートの剣とレーターの爪がぶつかり、せめぎ合いになったので

した

「どうした？勇者の末裔の力は、こんなもんか？」

「く・・・っと言いたいけど、俺の勝ちだな」

「は？」

「足元ががら空きだ！とりゃ！」

リユートは、足払いをかけてレーターの転ばしました

「む！」

「喰らいやがれ！」

「ぐああああ！」

リユートは、レーターの胸に剣を突き立てました
レーターは、悲鳴をあげて倒れました

「な、俺の勝ちだったな」

「ほくさすが、でもまあまあね？」

「は？」

「最後までトドメをささなくちゃ？ えい！ 火の盟約により、我に力を示せ！ エレメンタルファイヤー！」

マゼンタの魔法により、レーターは灰になって、消滅したのでした

「このぐらいやらないと」

「……ま、いいけど……」

結論、一番酷いのは、マゼンタと言う事ですな、恐ろしい……

「と、とりあえず敵は倒しましたね、先に進みますようか？ リュートさん」

「あ、ああそうだな」

リユート達は、砂漠の奥に見える建物目指して、進む事にしたのでしたとき

一方、レータ－はと言うと？

「ぐ・ふふふ、我、蘇ったり！」

おいおい、また復活してるよ？この人、本当にゾンビですか？

「さあ、勇者の末裔勝負だ！……って、いない……」

そうなのでした、リ्यूート達は先に行ってしまったて、レーターだけがその場に残ったのです

なゝんかかわいそうですね W

「逃がしたか……さては俺を恐れて逃げたな？」

それは断じて違います、はい

「待っている！勇者の末裔よ！俺が倒すからな？はっつはっはっはっは」

レーターは、そう叫んでいたとき

く第十七話く勇者と敵の戦いの巻く（後書き）

まだまだ続きますく

第十八話　砂漠の城の巻

さてさて前回、砂漠で何故かレーターと戦う事になったのでした
そして、余裕でリユート達は勝ちました

「余裕か・・・？」

余裕ですよ？まったく、正義の者としてリンチ見たいな事していい
んですかね？

「五月蠅い！」

まあそれはさて置き、リユート達は砂漠の奥に見える建物を目指し
ています

そして数十分後、建物に辿り着きました

「ふっ・・・暑いな」

「確かにそうですよね・・・まあ砂漠ですし・・・」

「な〜に言ってるの？これぐらい大丈夫だって？それに建物が見え
たわよ？あれ？・・・」

「どうした？マゼンタ」

「建物って・・・城？」

「ん？・・・あ、ほんとだ」

リユート達が見た建物は
おっきな白亜の城でした
近くに町があり、城下町だと思われそうですねゝ

「と、とりあえず寄ってくか？」

「そうですね、魔王の情報とかあるかも知れないですし」

「とりあえず行ってみましょう」

リユート達は、城下町に入ったのでした
オラクル城下町
中に入ると、人々が何故か土下座しているのです
はつきり言って変ですね、はい

「何でこの人達、土下座してるのでしょうか？」

「さあ？何かの宗教じゃないか？」

「あ、城から誰かやって来た見たいよ？」

確かに城の方角から兵隊の格好をした男と
派手なドレスを来た女性がやって来たのでした

「ひかれ〜！わが国の皇女、カナリア姫のお通りだ〜！」

兵隊の格好をした男がそう言いました

「お〜っほっほっほっほっほ！」

その光景を見ていたリユート達はどういうと

「なあどうする？」

「どうするって・・・」

「私達は土下座なんかしないわよ？ここの住民でも無いしね？」

「そうだよな、とりあえず様子を見るか・・・」

そう言っていると、カナリア姫と呼ばれた女性がリユート達に話しかけました

「ちょっと貴方達！」

「はい？」

「何で土下座しないのよ！私はとっても不愉快だわ！ハルト！」

「は、姫！」

「この無礼者達を解らせてやりなさい！」

「了解致しました！」

ハルトと呼ばれた兵隊は、リユート達に近づきました

「ちょっと向こうへ・・・」

「え？」

「ここじゃ話せませんので、どうかお願いします・・・」

ハルトはそう話しかけてきました

リユート達は不思議そうにしましたが、カナリア姫から遠く離れた場所に行きました

「あの、一体何ですか？」

「貴方達、ここに住人じゃないですね？」

「はい、そうです」

「それじゃ、ここ風習は知らないのも当然ですね？」

「ええ、まあ知らないって言えば知らないわね？」

「では、教えます・・・ここは、オラクル城下町と言って、砂漠にある国です、ここでは姫、つまりカナリア姫の言う事が全て正しいと言う事になっているんです」

「じゃあ、さっき町の皆が土下座してたのは・・・」

「はい、姫様が「私が出かける時、町の皆は土下座して向かえるように」って言われて・・・それであゝゆう風になっているのです」

「なんかやな女ね？カナリア姫って」

「そうですね、皆、むかつくと思っただけかな・・・」

「いや、皆さんいつかこらしめてやろうと思っただけです
けど、それは無いです、何故なら、この国の王が娘の我侭つきあつてくれてありがとうと言ってくれるんですよ

町の人々は王様の事が好きですから、暴動とか今まで一回も起きた事ありません」

「そうですか、この国、大変そうですね・・・」

「はい、もうちょっと姫様が優しい性格になってくれればいいんですけど・・・」

そう話していると、当の本人がやって来ました

「ハルト！何の話をしていたの！」

「は、この者達にこの国の事を教えていたであります！」

「そう、ならば私の前に・・・ん？」

カナリア姫はリュートの姿を見て、考えてました

「ん？何？」

「その金髪の髪に青い瞳・・・もしかしてもしかして・・・」

「はい？」

「貴方！」

「わ、びっくりした！いきなり大声上げないでよ」

「貴方、伝説の勇者さまだったりしますか？」

「は？伝説って・・・俺はまだ伝説になってないけど・・・」

「まだって事は、勇者の末裔ですか？」

「一応そうなるけど・・・」

「そうですか！私は待っていました・・・勇者様が来るのを、あ、あのもしよろしければ私のお城を見学して下さい」

「どうする？リユート」

「そうだな・・・まあこの国の王様とか会って見たいし、いいんじゃないか？」

「もしかしたら料理とか出るかも知れませんか？とりあえず行ってみましょう？」

こうして、リユート達はカナリア姫に連れられて、お城に向かう事にしたのでした
リユート達がカナリアに連れられている頃、オラクル国にやってくる者がいました

「勇者の末裔め・・・もしかしたら、あの国にいるかもしれない・・・よし、ここは仲間を呼んで、攻め込んでやる」

話したのは、変態獣人のレーターでした

「誰が変態じゃ！」

だって、普段の格好からにして怪しいですもん

「これもそれも勇者の末裔どものせいだ！覚えていろ！」

それをやつあたりと言うのでは？

レーターは、そう言って、オラクル国に向かう事にしたみたいですが……でも仲間って一体誰なんでしょうね？ちよっときになりますか……

第十八話　砂漠の城の巻（後書き）

まだまだ続きます

第十九話　砂漠の城の王様の巻

さてさて前回、リユート達は砂漠の国

オラクルに辿り着いて、そこの皇女様にお城に案内される事になったのでした

一方その頃・・・

「ねえねえ、あそこに行ったらなんかあるの？」

「そうだ、あそこに見える国に、勇者の末裔がいるのだ、これも魔王様の為、滅ぼしてくれる！」

「何で、そんなにはりきってるのかな？　なんかあったの？　あいつらと」

移動しながらそんな話を話していたのは、お間抜け獣人のレーター君ともう一人、新しく登場したナナでありました

「くおら！　誰がお間抜け獣人だ！」

だってほんとの事ですよね？　いつも負けてるんですからw

「まあいい・・・今こそ、勇者の末裔を滅ぼす！　ナナ、お前も手伝

うのだ！」

「何で？」

「・・・」

その場は沈黙しました

「お、お前は何しに来たんじゃああああ！」

「うーんと・・・暇つぶしw」

「・・・」

レーター君ったら、呆れてますねーまあ当然かな？

「ま、まあいい・・・とりあえず行くぞ」

「了解」

結局、行く事になったみたいですね？

レーター達は、オラクル国に向かう事にしたのでした
一方その頃・・・

「ここが、私の住むお城です、勇者様」

「近くで見ると、やっぱり大きいな」

「そうよね、でも、何でこんな所にお城なんか建てたんだろう？」

「さあ・・・私にも解りません」

「とりあえず中に入って下さいませ、お城の中を案内します」

リユート達は、オラクル国の近衛兵、ハルトに城の中を案内されたのでした

城の中は大きい城にふさわしく、広かったのです

「えーっとここが、客間でこっちが食事室で・・・」

「ねえ・・・」

「何？マゼンタ」

「あの人、ここ広すぎて、何処に何があるか解ってないんじゃない？」

「そうですね、だって手に隠し持っている紙、見えますし」

「あ、ほんとだ」

リユートは、言われた通りにハルトの手を見ると、確かに一枚の紙があったのです

「確か・・・あ、ここですここが王の間です」

「ここまで案内ご苦労様、ハルト、もう下がって良いわよ」

「はい、了解しました」

そう言っってハルトは、いなくなりました

「さあ、私のお父様に紹介します、勇者様」

「あ、ああ・・・」

リュート達は、カナリアに言われて、王の間に入ったのでした
王の間には、王冠にマントを羽織ったカイゼル髭の男が、椅子に座
っていました

「あれが・・・王様？」

「そのようね」

「私・・・思うんですけど・・・」

「何？ククル」

「王様にじゃなくて、執事に見えます・・・」

「あ、ほんとね」

そうなのでした、服装を変えると確かにどっかの大金持ちの家に働く執事に見えるのでした

つまりはつきり言って、王様には見えないって事ですね〜w

「ん？お帰り〜カナリア、今日は早いな？何かあったのかな？」

「ただいまお父様、今日ね？伝説の勇者様をお連れしたのw」

「何？勇者・・・？」

王様は、リユート達を見ました

「ど、ども・・・」

「お前達が、勇者パーティか？」

「そうよ？こっちのリユートは正真正銘勇者の末裔よ」

「証拠はあるのか・・・？お前達が本当に勇者の末裔である証拠が」

「証拠・・・あります？リユートさん？」

「証拠・・・？証拠と呼べるような物は・・・」

あの〜何か忘れてませんか？多分あると思いますけど？

「まさか！」

「お、お父様？」

「な、何？」

「私の娘を誘惑する為に嘘をつきよったな!!」

「は？」

本当に何を言っているのでしょうか？

「な、何言ってるの！お父様！」

「いゝや、私は騙されないぞ！」

なんかやばそうな展開になってきましたね？
リユート達は、どうするのかな？

「ほ、ほらリユート、なんか出しなさいよ？リユートが勇者の末裔である証拠を」

「そんな事言われてもなあ・・・何かあったっけ・・・」

「早くしてください、なんかあの人凄い目で睨んでいますよ？」

リユート達が話していると、ハルトがやって来ました

「おお、ハルト丁度良い所に、この者達を・・・」

「王様！大変です！」

「な、一体どうしたのだ？」

「怪しい奴がここにせめ込みました、町を破壊し続けています！」

「な、何だと！」

「それってもしかして・・・」

「もしかしてさ・・・あのレーターとかじゃない？」

「多分そうだと思います」

「破壊しながら「勇者の末裔は何所だ！我が名はレーター！出て来い！」と言っております、一体何の事でしよう？」

「私に聞かれてもな・・・レーターとは何者だ？それに勇者の末裔って」

それを聞いたリユート達と言うと

「やっぱりあのレーターか・・・」

「行きましょうリュート、今度こそやっつけるわよ」

「確かに何度も復活したらむかつきますもんね」

うんうんそうですね

「行くぞ！」

「あ、勇者様、どちらに・・・」

「悪者退治だ！」

そう言って、外に出て行ったのでした

「もしかして・・・本当に勇者の末裔か・・・？」

王様は、そう呟いていたのでした・・・

第十九話　砂漠の城の王様の巻　（後書き）

まだまだ続きます

第二十話　砂漠の町での戦いの巻

さてさて前回、リユート達はオラクルのお城の中に案内されて王様と話したのでした、そしてオラクル城下町に・・・おっとここからは言わないでおきましょう

「おい・・・何でだ」

だって言っちゃうとつまらないじゃないですか

「何がつまらないのだ！ええい！この町を破壊してやる！獣浪波！」

「レーターったら・・・ま、いっか、面白そうだし」

そう、オラクルにやってきたのは、レーターとナナなのでした
レーターは、町を破壊し続けています、まったく何をやっているの
でしょうね？

「五月蠅い！こうしていれば、勇者の末裔どもが現れる筈だ！」

「そうかな？私は、そう思わないんだけど？」

「ナナ、お前はどっちの味方なんだ」

「私は、面白い方の味方よ？」

「……」

レーターは、黙ってしまいました
おや？どうやらお目当ての者達が、やって来た見たいですよ？

「また、お前か？レーター」

「何で生きてるのよ、私がトドメ刺した筈なのにね」

「相変わらず変な格好ですね……」

やって来たのは、リユート達でした
でも、いきなり酷い事を言っているような気がするのは気のせいでしょうか？

「ふふふ……待っていたぞ！勇者の末裔よ！
お前達、滅ぼしてくれるわ！はっはっはっは！」

レーターったら、言ってる事悪役その者ですね
まあ、それが彼の本性なのかも知れないですね

「また会えたね？」

ナナは、リユート達に言いました
リユート達は、こう答えました

「えーっと・・・誰？マゼンタ、覚えてる？」

「私に聞かないでよ、私も覚えてないわよ、ククルは？」

「えーっと、確か・・・」

「前にも言ったでしょ、私はナナ
一応レーターと一緒に来ただけ、よろしく」

「ナナ、来ただけとは何だ！この者達を倒しに着たんだろう」

「私、楽しそうだから来ただけよ？それに手伝うってひ・と・こ・
とも言っていないと思うけど？」

確かに、ナナは「リユート達と戦うから手伝って」とレーターにお
願いされて
手伝うって答えてませんしねー

「・・・と、とにかく覚悟しろ！勇者の末裔よ！」

レーターは、リユート達に向かって、構えました

「さっさと終わらせるか！もう二度と復活出来ないようにな！」

あのーなんか、また酷い事言ってるような気がするのは私だけでしょうか？

「また私の魔法で黒こげにしてやるわ！行くわよ！火の盟約により、我に力を示せ！エレメンタルファイヤー！」

マゼンタは、レーターに向かって魔法をぶっ放しました

「ふん！いつまでも同じ手を食うか！はっ！」

レーターは、軽々と避けてリユート達に突っ込んで来ました

「食らえ！獣我爆心拳！」

レーターは、拳を構え、無数に連打してきました

「格闘技系の技ですか・・・なら、私も負けはしません！はあ！竜巻連打翔！」

ククルは、レーターに向かって技を繰り出しました

「む、なかなかやるな・・・」

「そっちこそです」

お互いに睨み合って、動きませんでした
あのく格闘技大会じゃないんですから、勝負つけちゃったらどうな
んですか？

「解っている！今こそ俺の最終奥技を！」

レーターがそう言おうとした途端

次の言葉が出ませんでした、それは何故かと言うと？

「俺を忘れてたのがいけなかったな、成仏しろ」

そうなのでした、ククルとレーターが戦っている時に、リユートは、
剣を構えて、レーターに攻撃したからです

「ぐ・・・ぐはあああ！」

レーターは、そう言って倒れました

「あゝあ、またやられちゃったみたい、レーターってほんとくに弱

いな？」

あのく戦ってもいないのに、何言ってるんでしょうかね？

「あとはお前だけだが」

「どうする？魔王の仲間だし、倒す？」

「そうだな・・・」

リユート達が話していると

ナナは、こう言いました

「なんか私と戦うって言ってるけど、私はそのつもりで来た訳じゃないから、戦いは今回、やめにするね？じゃね」

ナナは、そう言ってレーターと一緒にぱっと消えたのでした

「結局何だったんだ？」

「さあ・・・でも勝ったからいいじゃない」

「そうですね、これからどうします？」

「とりあえず魔王の情報を聞き出して、この国からおさらばするか」

「それがいいわね、この国の王様とかにまた会いに行くのもね」

リユート達は、そう言って魔王に関係する情報を集める事にしたのでした

そして、集まった情報は、この国から東に行った所に怪しい噂があると言う事なのでした

「よし、東に向けて行くか！」

「お」

リユート達は、そう言って国から離れて行ったのでした
一方その頃、お城では

「町の火が消えてる・・・やっぱりあの方達は本物の勇者パーティーだったのね」

「うーん、でもなあ・・・なんか信用におけんのだが・・・」

「何言ってるの、お父様、あの方達が行ってくれたから、被害が最小限にすんだのですよ？」

「そうか・・・やはり、あの者達は本物だったのかも知れんな・・・
よし、早速その者達をこの城に呼び戻そう」

「ほんとですかお父様、勇者様・・・また、お会いできるのですね」

しかしカナリアの願いもむなしく、リユート達はもう国から離れて行っているのだとさ

～第二十話～砂漠の町での戦いの巻～（後書き）

まだまだ続きます～

〈第二十一話　魔王とその部下の話の巻〉

さてさて前回、リユート達は砂漠の国から東に移動する事になったのでした
でも今回のお話はと言うと

「ふむ・・・」

ここは、どこかのお城の中、真っ黒なマントにマスクをつけた者がいました

「次は何をするかだが・・・まだ私の力は完全に戻ってないからな・・・」

そう呟いていたのは、人類の天敵、悪の親玉の魔王でした、どうやら何か考えてる見たいですね？

「どうすれば人々を恐怖を与える事が出来るのだ、我は恐怖とか好きだからな・・・ふっふっふ」

あのくそんな独り言言ってるのって寂しくないですか？誰も聞いてませんしね？

「五月蠅い？我は魔王だぞ！」

だから何です？はつきり言って、変人ですよ

「・・・もういい、なんか疲れたぞ・・・」

魔王がそう話していると

「魔王、たっだいま」

やって来たのは、ナナとレーターでした、ちなみにレーターは、前回の戦いで

傷ついたまま意識不明の状態です、はっきり言って戦闘不能？

「ん、またやられたのか・・・それにしてもナナ、お前は無傷だな？」

「だって、戦ってないもん、戦ったのはレーターだけだし？」

「じゃあお前は何しに行ったのだ！」

「何怒ってるの？私は、ただ面白そうだったから

レーターに着いていっただけなんだけど？まあすぐに勇者達にやられちゃったけどね？」

「勇者達だと？会ったのか？我の憎き者に！」

「会ったわよ？今は、こっちに向かってるよ？まあまだ遠いけどね？」

「そうか・・・ならナナ、お前に命ずる、勇者達の行動を監視せよ
そして状況を説明するのだ！」

「何で私がそんな事しなくちゃいけないのよ？自分で行けばいいじゃない」

「お前な・・・一応我の部下なのだから、我の命令を聞くのだ」

魔王はそう言いました、それを聞いたナナはと言うと

「はいはい解りましたよ、やればいいんでしょう？まったく人づかい
荒いんだから」

「荒いつてな？お前・・・何もしとらんくせにそんな事を言うな！」

確かに魔王の言ってる事も解る気がしますね？だってナナは、確かに何もやってませんからね

「だから、行っってくるのだ！解ったな？」

「別にいいけど、それより・・・これ、どうすんの？」

ナナは、レーターを指差してそう言いました、ちなみにしつこく言う
と、レーター君は、瀕死の状態です

「そうだな・・・は！」

魔王は、力を込めてレーターの腹を叩きました
すると、あら不思議、なんと、レーター君がゾンビの如く蘇ったじ
ゃありませんか
さすが化け物

「う・・・ここは・・・ま、魔王様!？」

「うむ、いつまでも倒れてるのな? 我が蘇らせてやったのだ」

あのく貴方は、僧侶ですか?

「そうですか、魔王様、ありがとうございます

しかし、俺は任務を失敗したのです、ですからもう一度!
俺にチャンスを与えて下さい!」

「そうだな・・・よし、またお前にまかせるぞ!
ナナと一緒に、勇者達の情報を集めてくるのだ!」

「は!」

「えく私もく?」

「何か言ったか? ナナ」

「何でもない、さあ行きましょう」

そう言って、ナナとレーターは姿を消したのでした

「やれやれ、しかし・・・もしかしたらここに勇者達が来るかも知れんな

今のうちに作戦の練るのがいいのか？うゝむ」

魔王は、悩んでいたのでありましたとさ

一方その頃、レーターとナナはと言うと？

「おい、ほんとにこっちの方角であってるんだろうな？」

「多分ね、私の勘は当たるわよ？私を信じて」

「どうも信じられないんだがな・・・」

「まあまあ、さあレッツごゝw」

レーター達は、リユート達を探す事にしたのでした

でも勘だけで進んでるなんて、本当にリユート達に会えるのでしょ
うかね？

リユート達に会えるのか？それは、まだ解りませんでしたとさ

〈第二十一話〉魔王とその部下の話の巻〈（後書き）

まだまだ続きます

第二十二話　雪の中の町の巻

今回のお話は、魔王側の話ではなくて、本家リユート達のお話をお送り致します

魔王達がリユート達を探そうとしている頃、リユート達はどういうと？

「さ、寒いな・・・」

「確かにね・・・さっきまで暑かったのに、何でこんなに寒いのよ！？」

「雪降ってるからではないですか？」

確かにそうなのでした、リユート達が今いる場所は、雪が降っていて、少し降り積もっている場所なのでした

「これからどうする？とりあえず」

「とりあえず町を探して、暖まりましょう？」

「そうですね、ちょっと寒いですし」

リユート達は、近くに町が無いが、探す事にしたのでした、数分後、探せば見つかるもんですね？

リユート達は、町に到着した

「なんか簡単に見つかったな」

「まあいいじゃない、早速暖かい場所を探しましょう？」

「そうですね」

リユート達は、町の中に入りました

ちなみに町の名前は、トロイトって言わらしいです

「中に入ったのはいいが、誰もいないな？」

「もしかして、無人の町？」

「無人では無いらしいですよ？ほら、家に明かりが灯っていますし」

「あ、ほんとだ、ちょっと尋ねて見るか」

リユート達は、明かりのついた家に入ろうとしました

あのをこれって、不法侵入じゃないですか？

捕まりますよ？

「ちゃんと、声、かけるぞ！ しません〜誰かいませんか？」

しかし、返事がありません、唯の屍のようだったとはいきませんが、明かりがついているのに、返事がありませんでした

「おかしいな？ いる筈なのに」

「あ、あっちに窓があるわよ？ そっから進入する？」

貴方は、何泥棒見たいな事を言ってるんですか？

「まあ中を覗いてみよう」

リユート達は、窓のほうに行って、部屋の中を覗いてみました

「・・・なんか倒れてる人がいるのだが、これは何かの病気かな」

「とりあえず助けましょうよ？ まだ意識があるようですし」

リユート達は、勝手に人の家に入って、倒れている人を呼び覚ましました

「一体、何があったんですか？」

リユートがそう聞くと、男の人はこう言いました

「うう・・・地獄のような・・・感じだった・・・」

「地獄？ 一体どうしたの？」

「ん・・・所で、君達は？ 人の家に勝手に入ってきて、まさか泥棒か！？」

「違います、貴方が倒れてたので気になって、入ったんですよ、ところで、一体何があったんですか？」

「実は・・・」

男は語りだしました

「俺は、普通に読書をしていた、そして何か外から音楽が聞こえたのだ、気になって、窓を開けたとたん、すごい程の怪音波が俺の耳を直撃して・・・あとは、覚えてない・・・」

「怪音波・・・？ なんか、事件の匂いがするわね・・・」

「まさか、魔王の手下がこの町にやってきたのでは無いですか？」

「そうかも知れないな・・・とりあえず、探してみるか」

「もしかして、君達が怪音波の謎を解き明かしてくれるのか？」

「え？ まあ、そうなるかと・・・」

「そうか、この町の為に頑張って欲しい、怪音波は外から聞こえたから

外に出て、探しに行ってくれ」

こうして、リユート達は、怪音波の謎を解き明かす事になったのでした

でも、本当に魔王の手下の仕業なんでしょう？まあ、その謎は次回明らかになることでしょう

く第二十二話く雪の中の町の巻く（後書き）

まだまだつづきますく

第二十三話　少女の歌声の巻

さてさて前回、リ्यूート達はトロイトと言う町に辿り着き

怪音波？で倒れていた男に話を聞いて、怪音波の発生源を調べる事にしたのでした

「怪音波って言ってたけど、どうする？」

「そうですね・・・辺りは一面銀世界ですし・・・人の姿一人も見えないんですけど」

「と、とにかくさっさと探して暖まりましょ！」

そう言っ、町のあちこちを探索するのでした
そして数分後、一人の少女が現れた！

「何でモンスター見たいに言うのよ」

まあそれは置いて、リ्यूート達の前に一人の少女がいます
手に持つてるのは、何故かマイクでした

「あの〜ここで何を？」

リ्यूートがそう言うと、彼女はこう答えました

「私はルミ、私は歌うのが物凄く大好きなの、でも他の皆は私の歌を聞いてくれないわ、何故だと思う？」

「さあ？そんな事言われたって、初対面だから判るはずないでしょ」
確かにそのとおりです、はい

初対面で相手の事が判るのなら、超能力者？って感じもしますし

「私が歌うと何故か「すまない用事を思い出した」とか、すぐにいなくなるか、寝ちゃうのよ？」

なんかだんだん理由が判って来たような気がしますね？

「だから丁度いいわ、貴方達！私の歌、聴いてくれない？」

「え？どうする？」

「そうね・・・」

「別にいいんじゃないんですか？これも人助けなのかも知れませんか？」

「そうだな・・・じゃあ、いいよ」

リュートがそう言うと、ルミは笑顔でこういいました

「ほんと！？ありがとうくじゃあ早速」

ルミは、そういつてマイクを持ち、すーと息を吸ってこういいました。

「ぼおおおおおえええええ！♪く！」

ルミが歌った瞬間、ルミを中心に波動が生まれ、衝撃波となって辺りに襲いかかります

あのくこれって？もしかして、やばいのでは？

「こ、これはきついぞ・・・意識をしつかいしないと、気絶するく」

「そうですね・・・み、耳をふさいでも音が聞こえますく」

「私は誰く？ここはどこく？そして何をやってるく？」

一人壊れましたね、はい

彼女の歌は、五分ぐらい続いて、ようやく終わりました

「ふう・・・、ねえ？どうだった？」

「どうだったって・・・気絶する所だったぞ！」

「そうですよ・・・」

「っは！私は一体・・・」

どうやら元に戻ったみたいです

このままでもよかったのに・・・

「ん？」

いえいえ、冗談ですよ

どうやら怪音波の原因は、彼女の歌のせいみたいです

「やっぱり・・・私・・・歌の才能ないのかな？」

そのとおりだと思います、はい

「何か他に原因があるんじゃないか？例えば、そのマイクとか」

「マイク？」

「そういえば町とかでも見かけないマイクね？それどうしたの？」

「これですか？これ、拾ったんですよ、使ってみたらまだ使えそうなので、いっつも持ち歩いているんです」

「じゃあ、それを使わないで歌ってみれば？」

「うーん、やってみます」

ルミは、そう言っ、マイクをリュートに渡すと、声を出して、歌い達しました

「ラララ〜♪」

「耳が痛くならないですね」

「そうね、どうやら原因はマイクだったみたいね？」

「そのようだな」

彼女は歌い終わると、こう言いました

「皆、文句を言っ、来ないって事は・・・もしかして直りました！？」

「はい、原因はこのマイクです」

「そうですか、ありがとうございます！では、私は別の町に行っ、歌いに行きますので、そのマイクは差し上げます、では」

そう言っ、ルミは去っ、いったのでした

「とりあえずこの町での怪音波はこれで解決だな？」

「そうね、ねえ？このマイク、武器として使えそうじゃない？」

「確かにそうですね？」

こうして、とりあえず武器？の超音波マイクをゲットしたのでした
リュート達は、魔王の情報を町の人々に探偵みたいに聞き込みをしましたが

結局何も得られず、町から出、行っ、たのでしたとき

ゝ第二十三話ゝ少女の歌声の巻ゝ（後書き）

まだまだつづきますゝ

第二十四話 洞窟での戦いの巻

さてさて前回、リユート達は前の町で、マイクを手にいれたのでした、でも使い道あるのでしょかね？

「とにかく持ってれば何かと役にたつと思う」

そうかなあ？まあ、そんなことはどーでもいいとして

リユート達は洞窟にたどり着きました

「この洞窟、何処に繋がってるんだ？」

「さあ？でもここよりは暖かい所に繋がってると思いたいわ」

「そうですね、ここにいても寒いだけですし、中に入りましようよ？」

「そうだな・・・そうするか」

リユート達は、洞窟の中に入る事にしました、中に入ると、一本道の通路がありました

「これ、何処まで続いているのかしら？」

「さあ？奥を見ても、明るくないしな？ってそれよりこう暗くちゃ、思うように進めないぞ？どうする？」

「そうですね・・・私、明かりとか持ち歩いてませんし、マゼンタさんは？」

「ここは私の出番のようね？はああ！光の盟約により、我に力を示せ！ライトソード！」

マゼンタは、そう言う光の剣を出しました、なんで剣なんでしょうね？普通の明かりでもよろしいかと思うんですけど？

「何で剣なんだ？普通の明かりでよくないか？」

確かにそのとおりです

「この方が敵が現れた時、やつつけられるでしょ？はい、これ、リユートが持ってたね」

そう言って、マゼンタは光の剣をリユートに渡しました

「まっまあこれでとりあえず明るくなったから、先に進むぞ」

「お」

リユート達は、洞窟の奥深くまで進みました、と言っても一本道なので迷うはずないのですけどね

「そろそろ出口みたいだな？」

「そうね、まあ何も無かっただけマシなんじゃない？」

「そうですね」

そう話しながら、出口に向かって歩きました

そして、洞窟を抜けると待っていたのは

「勇者の末裔ども！見つけたぞ」

「やつほく久しぶり」

待っていたというか、現れたのは

お間抜け獣人のレーター君とカード使い？のナナでした

「だから何で俺がお間抜けなんだ！」

「まあまあそう怒らないの、そう怒るすぐにお爺ちゃんになっちゃうよ？」

「五月蠅い！」

あのと何で漫才みたいな事してるんですか？ほら、リユート達なんだか呆れてますよ？

「と、とにかくお前達の旅はここまでだ！観念するんだな？」

そう言ってますが、どうします？ぼこっちゃいます？

「そりゃもちろん、ここにいて事は俺達の旅の邪魔をしてるわけだから」

「戦うしかないようね？私達の邪魔をしてるんだし？それに・・・ちよっと戦ってなかったから、楽しみかも」

なんか危ない事を言っているような気がするのは、私だけでしょうか？

「行くぞ！ナナ！」

「命令しないの、私は勝手にやらせてもらうね」

そう言って、リユート達とレーター達の戦いが始まったのでした

「食らえ！獣狼波！」

レーターは、リユートに狙いを定めて、襲いかかりました

「そんな攻撃にやられるか！とりゃあ！」

リユートは、持っていた剣で対抗しました

「隙あり！食らえ！」

レーターの攻撃を避けて、リユートはレーターに斬りかかりました

「ぐああああ！・・・って」

おや？何か変ですよ？リユートの攻撃がクリティカルヒットしたと言うのに、レーターは、何故か無傷でした

「全然痛くないぞ！俺をなめてるのか！」

「ば、馬鹿な・・・なんでやられないんだ！？」

リユートは、持っていた剣を見てみました

ちなみに今持っているのは、マゼンタから受け取った光の剣です

「おいマゼンタ！この剣、全然斬れないぞ？」

「あれ？おかしいな、ちよつと貸してみて」

マゼンタは、リユートから剣をひったくると、レーターに向かって投げつけました

投げた剣は、レーターに刺さらず、地面にも刺さらず、ぽとんと地面に落ちました

「どうやらライトだけしか効果なかったみたいね？あはは・・・」

「あはは・・・じゃないだろ・・・しょうがない、これで相手してやる」

今、思ったんですが、光の剣で戦うより、いつもので戦えばよかったんじゃないですか？

それにやっぱり、剣じゃなくてもよかったって感じみたいですね

「武器を変えたところで、俺が負ける筈ないわ！」

「流星斬！二段斬り！」

あっさりとリユートの攻撃食らっちゃいました

もしかして、レーターってほんとに弱いのでは？

「ぐあああ！俺を倒しても、第二の俺が・・・」

何を言っているのでしょうか？

そう言ってレーターは倒れて動かなくなりました

「ふう、案外楽勝だったな・・・そういえばあともう一人いたような？」

リ्यूトは、ナナを探しました

そして驚きました、何故驚いたのかと言うと

「な・・・ククル！傷だらけじゃないか・・・」

「う・・・すいません・・・この人、かなりやります・・・」

何があったんでしょうか？でもどうやら私がレーターとリ्यूトの戦いを実況している時

ナナとククルが戦ったみたいですね？

「ちょっと弱くない？あ、私が強いのか、なくんかレーターやられちゃったし、もういいや、じゃね」

そう言って、ナナはぽつと消えました

「一体何がしたいんだ？それより・・・本当に俺達の敵なのか？とどめささなかったしな・・・」

「それより、大丈夫？ククル？酷い怪我よ？私が直してあげるね？」

そう言って、マゼンタは何か呪文らしき言葉を言いました

「あれ・・・？そういえばマゼンタって確か、回復呪文使えたか？」

「痛い痛いのとんでゆけ！痛い痛いのとんでゆけ！」

あのくそなんて痛みが飛んでったら苦労しないんですけど？

「あ、ありがとうございます、おかげで元気になりました」

「嘘だろ！？何であんな呪文？で直るんだ！？」

「失礼ね？私これでも魔法使いよ？このぐらい出来るって

まあ、たまに失敗するけどね？」

「ま、直ったからいいか・・・（あまり深く追求しないでおう・・・）」

「それより、これからどうします？前方に町が見えますけど？」

「そうだな、今の所何も手がかり無いしな？あの町で魔王の情報を集めるか、行くぞ！」

「了解」

リ्यूート達は、前方に見える町に行く事にしたのでした
ところで、一つ気になる事があります、それは・・・

「ぐ・・・ふははは！俺は不死身だ！」

やっぱり、また復活しました、ご存知お間抜けレーター君
もうゾンビクラスですよ、貴方の生命力は

「さあ、かかって来い！勇者の末裔！・・・って、いねえ・・・」
レーターは、考えた後、こう言いました

「ナナめ・・・またいなくなったな？それよりも・・・あの町にい
るかも知れないな？よし」

そう言っ、レーターは前方に見える町に行くのでした・・・

〜第二十四話〜洞窟での戦いの巻〜（後書き）

まだまだ続きます〜

第二十五話 魔法使いの町での出会いの巻

さてさて前回、リユート達は、レーター達と戦って、魔王の情報が無いので、町に向かう事にしたのでした

「この町の名前は、マフーガって書いてあるな？」

「魔法使いが集う町？ってことは・・・魔法使いがたくさんいるって事？」

「そうかも知れませんか？」

「とにかく魔王の情報が無いんだ、入ってみよう」

そう言って、町の中に入ったのでした

町の中に入ると、魔法使いが集う町と書いてあるとおり

魔法使いがいっぱいいました

「大勢いるな、しかも皆、魔導師ルックだから判り易いな」

「本当、新しい術とか、教えてもらえるかな？」

「いっぱいいますから、一つぐらいは覚えられるのではないですか？」

確かにそうかも知れませんか？

リユート達が話していると、一人の魔法使いがリユート達に話かけてきました

「貴方達、何か困り事かしら？」

話しかけてきたのは、白髪の妙齢に近い女性の魔法使いでした
随分と年齢がいつているみたいです

「えーと、俺達は魔王の情報を探してるんだ」

「そうです」

「魔王か・・・ならば、私の試練に耐えられれば、魔王の場所に導いてやろう、どうだ？」

「本当ですか？何か嘘っぱいな・・・」

おいおいいきなり人の親切を疑ってますよ？

ちよっと失礼じゃないですか？

「私を信用してない顔ね？ちょっとついて来なさい」

「あゝ言ってるけど、どうする？」

「とりあえず行ってみましょうよ？もしかしたら魔王の居場所解るかも知れないですし」

「そうだな・・・」

リユート達は、白髪魔法使いの後をついて行く事にしたのでした
「ここでもいいわ」

魔法使いは、家も何も建っていない場所に辿り着くと、杖を構えて、
こう言いました

「さあ、貴方達の実力を測らせて貰うわ、三人でもいいからかかってきなさい」

そう言ってきました、どうします？

「腕だめしか？もしかして」

「そうみたいです」

「とりあえず戦いましょう！」

リユート達は、戦う事にしたようです

そして、十分後、どうなったのかと言うと

「まだまだですね」

リユート達は、ぼろぼろになってました

「く、強いぞ・・・この魔法使い」

「私の魔法が効かないなんて・・・」

「武術が・・・通らない！？」

「こんな力で魔王を倒せると思ってるのですか？まだまだ甘いですよ、魔王を倒したかったら、私が修行してあげますが、どうです？」

「・・・どうします？リユートさん」

「リユート？確かに今の力じゃ魔王になんか叶わないかも知れないわね？実際にこのおばあさんに負けちゃってるし、このおばあさんに修行して貰うのもいいかもね？」

「そうだな、こんなんじゃ魔王にすら、叶わないかもな・・・」
「どうやら、結論出たみたいです」

「俺達、修行します、お願いします」

「解りました、じゃあ行きます、魔法フィールド発生」

魔法使いがそう言うと、三人の姿が消えました

そして、三人はどうなったのかと言うと

「ここは・・・何処だ？」

そこは広い空間でした

地面があり空があり、ただ三人いるだけでした

そんな中、空と思われる場所から声がしました

「これは、私が作り出した魔法のフィールドです、この中の時間は、何倍も遅くなっていて、一時間いるだけで三日間の効果があります、なので、頑張って修行して下さい、三時間後に私から話かけますね」

「そう言われても、どうやって修行すれば・・・？」

「リユート、あっちから何かやって来るわよ？」

「あ、あれは・・・私達ですか!？」

何も無い空間からやって来たのは、自分自身でした

つまりリユートにマゼンタにククル、今、この場には六人いる事になってます

「フっ、俺達が相手してやる、自分自身が相手だ、どうだ？フッフッフ」

「おっっほっほっほ、私達に叶うかしら？」

「私達は、貴方達なんかに負けないもんねーキャハ」

・・・あのーなんか、偽者の方、本物となんか性格違いますか？

「なあ、俺達ってあんな感じだったか・・・？」

「わ、私、キャハなんて使いませんよ!？」

「私だって、あんな馬鹿笑いしないわよ!」

「ふ、まあ俺達の方が強いに決まってるからな、かるく相手してやるか」

「おっっほっほっほ、そうね？行きますわよ」

「キャハ、さっさとやつつけちゃいますうー」

なんか・・・鳥肌たちますね、こりゃ

「と、とにかく相手して勝たなくちゃいけないな!」

「そ、そうね、こんな奴らに負けたら恥よ!」

「そ、そうです! 絶対に勝ちます」

三人はそう新たに決意したのでした

一方その頃、魔法使いはと言うと

「どうやら、誰か来たようね? 私が相手しましょう、元勇者パーティー一員だった、このマイがね・・・」

マイと名乗った魔法使いは、そう言ったのでした・・・

〈第二十五話〉魔法使いの町での出会いの巻〈後書き〉

はい、前作キャラ登場です
まだまだ続きます

第二十六話　偽物との戦いの巻

さてさて前回、リユート達は白髪魔法使いのマイに出会い修行する事になったのでした、そしてマイの作り出した魔法空間にいたのは

「ふ、俺が相手してやるぜ」

「オッソッソッホッホ、行きますわよ」

「キャハ、やつつけちゃいますう」

そう、いたのはリユート達なのでした

ただし、かなり性格がいつちゃってますけどね？

「とりあえずこいつらと戦えばいいって事だよな？」

「そう見たいね？自分の姿を見てると鳥肌たつけど・・・やるわ」

「私だって鳥肌たってますよ・・・でも何とかやってみます」

確かに、自分と丸つきり別の性格を持った自分を見るのっておぞましいというか恐ろしいですもんね

「ふ、行くぞ！流星斬！」

「オッソッソッホッホ！行くわ！エレメンタルファイヤー！」

「キャハ正拳突き」

偽者達は、本物と同じ技を使って攻撃してきました

さあ、どうするのでしょうかね？

「どうするって、同じ技で戦ってやる！流星斬！」

「私だって、火の盟約により、我に力を示せ！エレメンタルファイヤー！本物の力、見せてやるわよ！」

「武の心はそんな性格ではいけません！正拳突き！」

こうして、本物と偽者の戦いが始まったのでした

その頃、マイはというと

「出てきなさい、そこにいるのは解かっています」

マイがそう言うと、出てきたのは、お間抜け獣人ことレーター君でした

「お間抜けじゃあない！」

「貴方・・・ここに何の用？見た所、普通の一般人じゃないですね？」

あのく上半身が獣のレーター君を一般人と呼べるのでしょうか？

「俺は勇者の末裔を探しているのだ、婆になんか相手にしない」
今、何気に酷い事言いましたよね？

「今言ったのは、この口ですか？」

そう言った瞬間、レーターの口は未知なる力によって塞がれました
「む、むむ！」

「ここは、私が相手をしてあげるわ、かかってきなさい」
そう言って杖を構えました

「ぐは・・・何とか話せたな、どういう訳かは判らないが相手してやるぞ！」

こうして、マイとレーターの戦いが始まったのでした
一方リユート達はと言うと

「く、なかなかやるな・・・」

「そのようね？さすがに自分が相手だと、やりずらいわ」
「確かにそうですね？」

リユート達と偽リユート達の戦いが始まって
二時間以上が経過しました

なんか・・・ずいぶんと時間かかってますね？疲れないのかな？
「フ、そんな腕では俺たちは倒せないぜ」

「オッソッホッホ！どうやら私達の方が強いみたいね？」
「キャハ、弱い弱い」

なんか性格が違うだけじゃなくて、むかつく事をさらりと言ってしま
うようですね？

あ、ほらリユート達なんだか怒ってますし
「もう手加減しないで、本気で相手してやる！」

あのくじゃあ、さっきまで手加減して戦ってたんでしょか・・・？
色々と疑問は残りますが、リユートは剣を構えて、斬りかかりました

「食らえ！流星斬十字斬り！」

「な、何！？フ・・・」

説明、流星斬十字斬りとは？

リュートの技、流星斬の斬り方を変えて、十字にクロスされた剣技である！

偽物のリュートは、十字に斬られて消滅したのでした

「やったわね？リュート」

「リュートさん凄いです」

「油断するな、まだ敵は残っているぞ」

「そうね、なら私も、疾風の盟約によって悪を滅ぼさん！旋風鳳仙花！」

「え？この力・・・ま、負けたわよ・・・」

説明、旋風鳳仙花とは？

言霊が必要な術で風の力を使って、カマイタチを無数に作り出し相手にあびせる術である

偽者のマゼンタは、それを食らって消滅しました

「残りは私の偽者ですね？」

「キャハ、先手必勝！とりゃあ！」

偽者のククルは、ククルに向かって拳を無数に繰り出してきました

「当たりません、その技は見切りました、こっちから反撃します」

ククルは、そう言って構えると言いました

「必殺必中！竜巻連打翔！」

説明、竜巻連打翔とは？

相手の回りを回転しながら、蹴りを繰り出して風を作り出して相手を吹っ飛ばす拳技

偽者のククルは、その技をまともに受けて消滅したのでした

「勝ったな」

「そうね？」

「とりあえず勝ったのはいいんですけど、このあとどうします？」

「そうだな・・・まだ連絡がないからな？修行してるか」

「そうね、いくら自分自身に勝ったとしても、魔王を倒せるかどうか判らないしね？」

「私も強くなる為に、修行します」

リユート達は、どうやら修行する事にしてみたみたいですわね？

一方その頃、マイはと言うと

「何だど〜！この力、化け物かああ〜・・・」

そう言ってレーターは、消滅したのでした

それにしても、やられるの早いですね〜

「ちよっと時間がかかってしまいましたね？さてと・・・」

マイは、こう言いました

「時間です、お戻りください」

そう言った途端、リユート達が現れたのでした

「修行は出来ましたか？」

「まあ、何とか・・・」

「そうね、とりあえず強くなったのを感じるわ」

「私もそう思います」

「ならば、最初に言ったとおり、私の魔法で魔王のいると思われる場所まで案内しましょう

魔王を倒してくるのですよ・・・ハア！」

え、いきなりですか？

マイの魔法でリユート達は、魔王のいる場所と思われる所へワープさせられたのでした

「頑張って下さいね、私では魔王に勝てなさそうでしたから、貴方達が勝つ事を期待しますよ・・・」

マイは、そう呟いていたのでした

こうして、リユート達の最後の戦いが始まろうとしていたのでした・・・

く第二十六話く偽物との戦いの巻く（後書き）

次が、ラストって感じですかね？

〈最終話〉最後の戦いの巻

さてさて前回、マイの魔法により、魔王の居場所までワープしたのでした

これってラッキーですよね？ 今までの旅は一体なんだったのでしょうかね？

「まあ、いいじゃないか、それよりここに魔王がいるのか」

「そう見たいね、魔王と言うからには、凄い所にいると思ってたけど・・・」

「なんかぼろっちいですね・・・」

そうなのでした、今リユート達がいる場所は、ぼろぼろのお城の中なのでした、ちなみに暗黒城って言うらしいです

「本当にこんな場所にいるのか？ なんかいなそうに見えるけどな・・・」

そうですねーこうんなぼろっちい場所にいたとなっては魔王と呼べませんよねー普通は

「あら？ 貴方達なんでここにいますのー？ どうやって？」

奥の部屋からやって来たのは、ナナでした

リユート達の出現により驚いています、まあ当然ですね

「ナナがここにいますって事は、魔王も近くにいるようね？」

「そのようです」確かに、ナナは魔王の部下ですからねー近くに魔王がいるかも知れません

「ここは通して貰う」

「いいよー別に」

は？ あのーいいんですか？ 普通は戦って通すものだと思っていたんですけど？

ほら、リユート達ぽかーんとしてますよ？

「あのーいいの？」

「うん、だって私は魔王の部下といっても、勝手にやってるだけだ

からね？魔王を倒すんだったら全力で相手する事ね？じゃね」

そう言って、ナナはパッと消えました

結局ナナは謎の人でしたね

「・・・と、とにかく魔王の居場所を探すぞ！」

「お」

リユート達は、暗黒城の中を探索しました

そして、数十分後案外見つかるもんですね

「見つけたぞ！魔王！」

「覚悟しなさい！」

「人々を恐怖に落とし得る悪しき者成敗です！」

「な、お前ら・・・ちょっと待て」

どうやらいきなりの訪問に魔王は驚いてますね？

まあそれも当然かと思っています

「はゝっはっは！よくここまでこれたな？しかし我はやられる訳にはいかないのだよ！」

そうやっていきなり大型の剣を構えました

「いくぞ！魔王！」

そう言ってリユート達を構えて攻撃を開始しました

こうして、リユート達のラストバトルが始まったのでした

あのゝところで、三対一は正義者としてはどうかと・・・

「行くぞ！流星斬！二段斬り！」

「甘いわ！」

魔王は軽くリユートの剣をなぎ払いました

さすが魔王ですね？どうやら簡単には勝たせてくれないですよ？

「これでも喰らいなさい！炎の盟約により、我に力を示せ！エターナルファイヤー！」

「その程度の魔法は効かん！マジックシールド！」

魔王は、魔法の壁を作り出し、マゼンタのエターナルファイヤーを反射させました

マゼンタの放った魔法は、マゼンタに降り注ぎます、あのゝ逃げた

方がいいですよ？

「解ってるわよ！」

マゼンタはぎりぎり避けたつもりだったのですが、少しこげました

「私も行きます！竜巻連打翔！」

「格闘技など我には無意味！ハア！」

魔王は、残像を使ってククルの無数の蹴りを避けました

「魔王・・・やります・・・」

「そうだな、でも俺達は負ける訳には行かないんだ！」

「そうよ！」

「まだまだだな、ここで終わらせてやろう！ダークエンパイアブレード」

魔王は、闇光する魔剣を作り出しました

「食らえ！」

そして、リユート達に向かって剣を振り下ろしました

おやゝ？これでリユート達の旅はジ・エンドですかねゝ？

「そんな訳あるか！何かないか・・・そうだ！これにかけてみよう！」

リユートは、何かを取り出しました

それは、以前ゲットしたマイクでした

「行くぜ！ラァー！ー！ーイ！」

なんか聞いた事あるような台詞言ってますが、それはおいといて、マイクから発せられた音波が魔王を直撃しました

「ぐ、何だ！この不快な音は！やめろゝ！！！」

「隙あり！これでも食らえ！祖父直伝！流星胡蝶乱舞剣！」

リユートの攻撃が見事にクリティカルヒットしました

「グハアアア、お、同じ技だと・・・グ・・・」

魔王は、ヨレヨレになってますね？こうなれば倒れるのも時間の問題でしょう

「とどめよ！光の盟約により、悪を滅ぼさん！シューティングスター！」

魔王が傷ついたので、マジックシールドが発動せず

マゼンタの魔法は、命中したのでした

「ふ、再び私の負けか・・・いや！私の野望達するまではやられん、やられんぞおお！」

そう言って、消滅したのでした

「や、やったぜ！」

「そうですね？でも・・・何か気になります」

「そうですね？倒したのはいいけど・・・気になるわ・・・」

リユート達は、そう思っていました

こうして、魔王は滅ぼされ、魔物も消滅してリユート達魔王を倒した者達として、英雄と呼ばれる事になったのでした

リユート達は決めました

もし、再び魔王が現れたら、自分たちじゃ駄目なら子孫に托そうと、そう決意したのでした・・・

「魔王やられちゃったの？あゝあ、つまんないゝさてと・・・これからどうしよっかな？」

結局ナナは何者だったのか？それはいまだに不明のままなのでした・

・

（END）

〈最終話〉最後の戦いの巻〈後書き〉

はい、見習い勇者セカンドもこれにて終了です。
長かったなあ・・・ほんとW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3951s/>

見習い勇者セカンドストーリー

2011年5月20日12時39分発行